身体操作・感覚変化
or
誤認・常識変換の２パターン！
憧れの気高く美しい大佐が
キモ男の変態肉奴隷に
変えられてしまいました…

俺の名前は●●●。

ほんの数ヶ月前までは帝国軍の下っ端兵士として
こき使われる日々を送っていた。

ある日、その鬱憤を発散しようと所属する部隊の指揮官
「セ〇ベリア・ブ●ス」大佐の着替えを覗こうとしたのが
運悪く見つかり、軍法会議にかけられる羽目になった。

なんとか軍刑務所行きは免れたものの懲罰として
重要資源であるラ〇ナ鉱石の調達任務を命じられた。
任務などと聞くと大層だが、要は鉱山での採鉱作業で
賤民階級のダル〇ス人がやらされる仕事だ。

俺は己の不運を嘆くと同時に
その元凶であるセ〇ベリア大佐を呪った。

そうして過酷な労働に従事し、叶うはずもない大佐への復讐を
夢想する生活を過ごしていたら転機が訪れた。

鉱山で落盤事故が起きたのだ。
幸い俺は大した怪我も無かったが、一緒に作業をしていた
ダ〇クス人の老人が巻き込まれ重傷を負い、亡くなった。
たまたま近くにいた俺が看取る形になったのだが
その際にこの紫色の石を譲り受けた。

虫の息の爺さんが語ったところによると
これはラ〇ナ鉱石に特殊な加工を施して作られた
ヒプノ鉱石というもので、持ち主の強い感情に反応し
それを繰り返すことで光を発するようになるらしい。
そしてその光を見た人間は深い催眠状態に陥り、
暗示で持ち主の意のままに操れるようになるという。

爺さんはヒプノ鉱石の力を説明をし終えると、
「どうか自分の代わりにこの石を完成しダ〇クス人の独立を――・・・」
そう言いかけて息を引き取った。
しかしその時は老人の戯言と思い、全く信じなかった。

その日の夜、いつものようにセ〇ベリア大佐を裸にひん剥いて
辱める妄想にふけっていると、石が突然光り出した。

爺さんの言っていたことは本当だったのか、強い感情とは
欲望でもいいのか、などと驚き、それでもまだ半信半疑だったが
試しに鉱山の監督官に光を見せて、俺を自由にするよう命じ
それが果たされたことでようやく本物だと確信した。

そして今。石の力で新しい名前を手に入れ別人になり、
セ〇ベリア大佐の副官として部隊に戻ってきた。

妄想を現実にして復讐するために・・・

一日目・大佐の執務室
●●●視点

「・・・より配属されました●●●中尉です。
武勇で名高いセ〇ベリア大佐のもとで働けて光栄です！
よろしくお願いします」
「ああ、話は聞いている。
中央の特命とはいえ、急な配属ご苦労だったな」

（どうやら俺の顔を覚えていないようだ。少し癪だが好都合ではある）
「早速ですが本題に入りましょう。こちらを大佐にお見せするよう言われてます」
「それは・・・ラグナ鉱石か？色が変わっているが・・・」
「ええ、特別な力のあるものでして・・・」

「ほら、こうすると光るんですよ」
「くっ…な、なんだこれは…？　頭が…思考が、うまく……その光のせいか・・・？」
「ひひっ、そうですよ。もっとよく見てください」
「ぐぅっ…貴様ぁ…！　今すぐ、それをしまえっ・・・！」
「ダメダメ、頭の中が真っ白になるまでしっかり見ましょうねえ～」

「……」
「ははは！　やった！　やったぞ！
もっと手こずるんじゃないかと思ったが
案外あっけないもんだったなあ……」
（いつもすまし顔だった大佐の
こんなよだれ垂らした間抜け面がおがめるなんて、
まったくあの爺さんには感謝してもし切れないな）

（おっと、感動してる場合じゃなかった。
お楽しみはこれからだからな）
『…いいですか、『これから私が言うことには
疑問を持たず、全て素直に従ってください』」
（何人か試してわかったことだが、最初は丁寧に
語りかけないと暗示だと認識されないらしい。
面倒だが、回数をこなす内に相手が命令に
慣れてくるから、それまではしょうがない）
「はい……
…従います…」
「よし、じゃあまず、服を脱ぎましょう」

「はい…脱ぎます……」
ぷるん♥
ばいん
（おおぉっ！　わかってはいたけど脱いだら
さらにデカイな！　想像以上のサイズだ…）

（夢にまで見た大佐の爆乳……！
ずっしりと重みがあって
片手じゃとても掴みきれない……）
むにゅっ
（揉み心地も最高だ……
指がたっぷり沈むほど柔らかいのに
中心に確かな張りがある！）
むにっ♥

「はぁっ…♥」
「ん？　ひひっ、胸を揉まれて気持ちよくなったんですか？」
「……はい…気持ちいいです……」
「ハハハっ！　感度がいいんですね。じゃあ次はどれぐらい感じてるのか見せてもらいましょうか」

「机に乗ってマ〇コが奥まで
よく見えるように広げて見せてください。
それと部下に対するように喋っていいですよ」
(素直なのはいいが、これだと大佐を辱める
実感が薄れるからな)
「…わかった…これで見えるか?」
「ええ、バッチリですよ。
もうすっかり出来上がってますねえ。
…ん? ひひっ、これは驚いたなあ。
大佐はまだ処女だったんですね。てっきり
例の皇子様とヤリまくってると思ってましたよ」
くぱぁ
とろっ

「…殿下への想いは敬愛で…
そういった類のものでは…ない」
「へえ、じゃあまさか恋人いた事ないんですか？」
「その……カ●ル少尉と…
……こ、交際している……」
（カ●ル少尉……どこかで聞いた名前だな…
そうだ、確か俺の前の副官だ。
ふん、うまいことやったもんだ）
もじ
もじ…♥
「なるほど。彼とはどれぐらい進んでるんです？
その大きな胸は揉ませてあげたんですか？」
「そっ、そんな破廉恥な真似はっ…！
…まだ、キスしただけだ……」
（ひひっ、エロい身体の割に純情で結構だが
マ〇コ広げて言う台詞じゃないな）

「初々しいですねえ。でもそれだと身体を持て余したりしませんか？」
「そうだ…だから……その…時々、自分で…シている……」
「ハハハっ、なかなか衝撃的な告白ですね。じゃあどんな感じでやるのか実演付きで説明してください」
「わ…わかった…まず、左手でこうやって…入り口を擦りながら…右手で胸を揉んだりして……ふぅ…、んっ♥」
もみもみ
くちゅ♥

「んっ！　んんっ…♥　ふぅっ…♥」
「意外と大胆な指使いだなあ。
いつもこんな激しいんですか？」
「いや…んぅ…でも、いつもより
気持ちいいから、ゆびっ♥がぁ、あんっ♥」
（ふむ、催眠で従順になってはいても
羞恥心はそのままだから、
見られながらのオナニーで興奮したのか？
ひひっ、お堅いようでエロい身体に似て
根は相当なスケベかもしれないな）

『はい、オナったままでいいんで
またこれ見てくださいね～』
『ん……』

「いいですか、【副官が着任したら親睦を深めるためにセックスをするのが規則】です。その際は【お互いより快感が得られるよう最大限協力し合うのが望ましい】んですよ。
「親睦のため……セックスする…」
「そうです。部下との信頼関係を築くのは大切なことですからねえ、ひひっ」
「じゃあ意識がハッキリしてきたら、上官から提案してくださいね」

「ん……よ…よし、○○○中尉……
その…規則だ。せ、セックスをするぞ」
「はっ、大佐のような美しく
エロい身体した女とヤレるなんて
光栄であります！　ふひひっ」
「そっ、そんな下卑た言い方をするな！
これはあくまで軍務だぞっ」
「ですが、快感を得るため協力し合うよう
規則で定められてますからね。
私は下品なビッチが好みなので
セ○ベリア様も出来るだけチ○ポ好きな
尻軽痴女のように振る舞って
【協力してください】」

「あ…ああ、わかった。努力しよう……」
「ありがとうございます。じゃあ早速ですが
チ○ポねだりの口上やってもらえます？
『セ○ベリアの処女マ○コにチ○ポぶちこんで
ガバガバのビッチマ○コにしてください』って。
さっき言ったことを踏まえて笑顔でね」
「っ……せ、セ○ベリアの処女マ○コに……
ち…チ○ポぶちこんで、ガバガバの
ビッチマ○コにしてくださいっ……」

「まだちょっと硬いけど、まあいいしょう。
それじゃ始めましょうか」
「あ、ああ……」

「蒼き魔女と恐れられる大佐でも
チ○ポ入れられるとなると、緊張するんですねえ」
「っ…緊張などしていない。無駄口を叩かず
さっさとその汚いチ○ポを
私のマ○コに挿して済ませる……」
「ひひっ、了解しました。
セ○ベリア様も規則を忘れないで下さいよ
ほら、今どんな感じか言ってくださいよ」

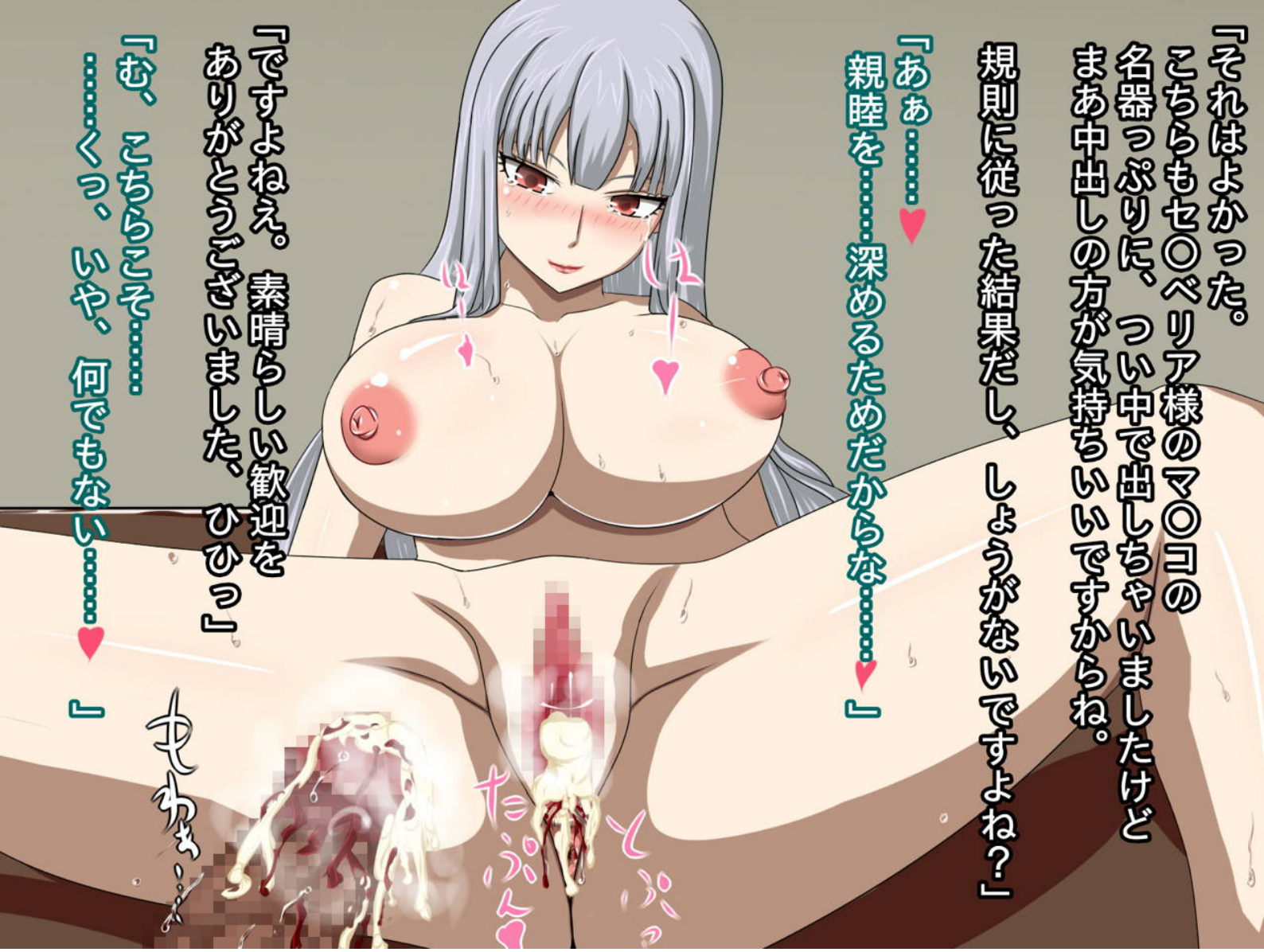
「うぅ…あ、熱いチ○ポが入ってきて……く…うっっ!!」
「お、開通おめでとうございます。すいませんね、彼氏でもないのに処女もらっちゃって」
ビクッ
ミチミチ
ブチッ

「【痛みが快感に変換されます】。
これでセ〇ベリア様の初体験は
素晴らしいものになりますよ、ふふ」
「それと【快楽を与えられる度
与えてくれた人物に感謝して下さい】。
【その快感の度合いに応じて
相手への感謝の念も強くなります】」

『んっ♥!?
なっ…♥　んぅ♥』
「いやあ、初物だけあって
キツキツで気持ちいいなあ。
セ○ベリア様の方も慣れてきたら
気持ちよくなってきたんじゃないですか？」

「そんなことっ♥ ないぃっ♥ ひゃぁっ♥♥」
「本当ですか？ 恥ずかしがらなくていいから 正直に言って下さい。 規則を守るために、ねえ」

「ひっ…♥ そっ♥ そうだっ♥
キモチイイっ♥♥！
マ○コ♥おくまでつかれてっ♥
あはあああ～っ♥♥」
ビっ♥
ドピュッ
ビュー


「それはよかった。
こちらもセ〇ベリア様のマ〇コの
名器っぷりに、つい中で出しちゃいましたけど
まあ中出しの方が気持ちいいですからね。
規則に従った結果だし、しょうがないですよね？」
「あぁ……♥
親睦を……深めるためだからな……♥」
「ですよねえ。素晴らしい歓迎を
ありがとうございました、ひひっ」
「む、こちらこそ……
……くっ、いや、何でもない……♥」
もわぁ…
たぷん♥
とぷっ

翌日

（昨日は胸がすっとしたが、思っていたよりも乱れなかったな。さすがはセ〇ベリア大佐、精神力も並じゃない。まあどのみち変態暗示を刷りこんでけば、いずれは……）
「……どうした、何をぼーっとしている。早く仕事にとりかかれ」

「はいはい、仰せの通り
仕事にとりかかりましょう」
「うっ…」

「……」
「よし、しっかり効いてるな。
【今日の任務は特殊な仕事。どんな内容でも疑問を持たず
専門家の私の指示に従って遂行してください】。
わかりましたか？」
「……特殊な……任務……
お前に……従う……」
「ええ、そうです。それではまず……」

「股はもっと開いて……結構です。これで準備完了ですよ」
「よし……それでは【マ○コカウンセリング】を開始する。●●●中尉、私のおマ○コの状況確認にとりかかれ」
「はっ、了解しました！」
（くく、あの大佐が真面目な顔でこんなバカげたことを！笑いをこらえるのが大変だ）

「昨日処女喪失したとはいえ、まだまだ綺麗なマ〇コですねえ。
どれぐらい感じやすいマ〇コなのか確認するので
そのまま手でマ〇コ開いて……
あ、ついでにご自分でオナる時のように
乳首でも弄っててください」
「わかった、こうか」

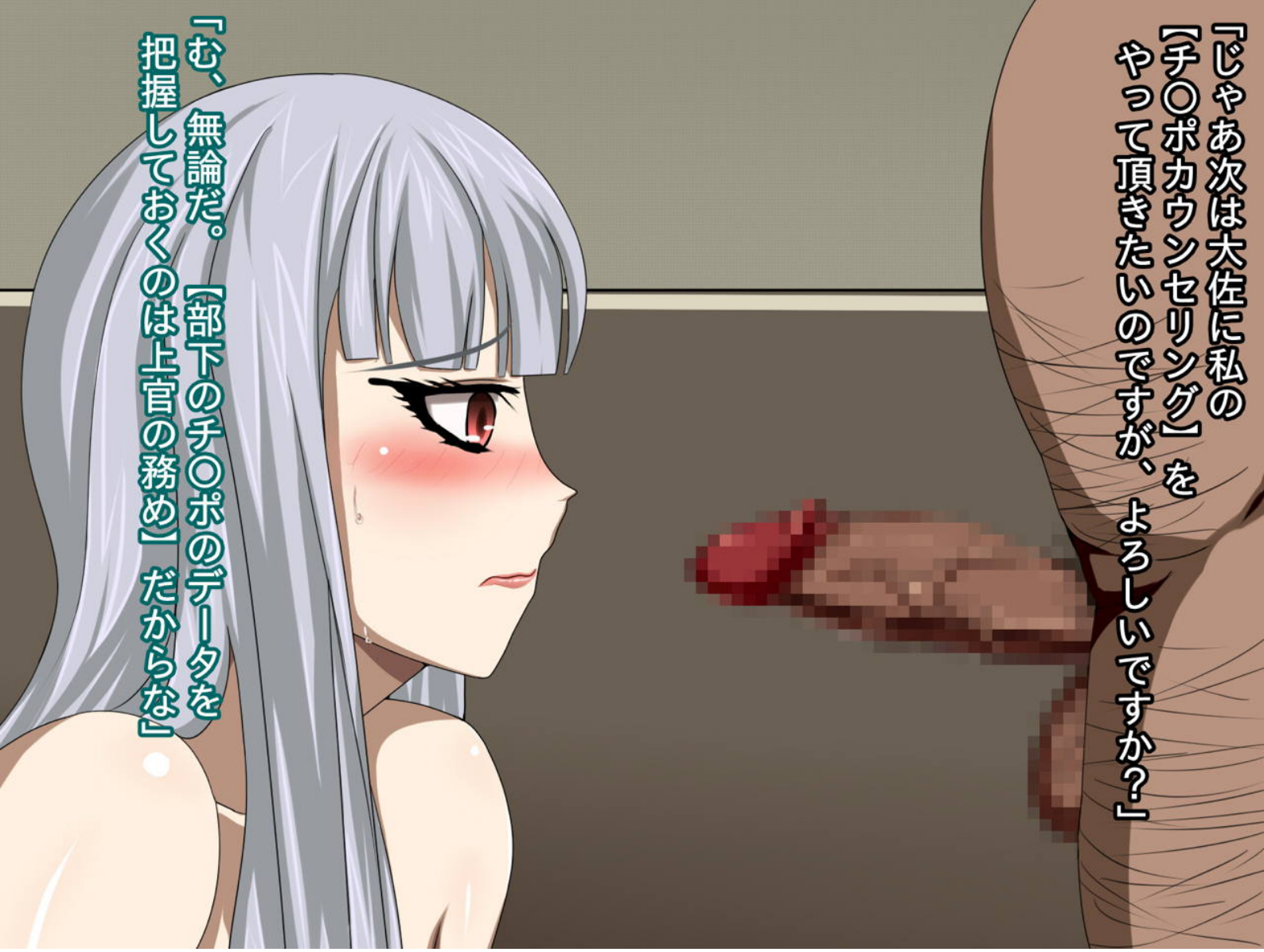
「うぅっ……」
「どうしました？　仕事ですから恥ずかしがらず
【思ったことは何でも正直に話してください】ね」
ぎゅうぅ♥
ぎゅぎゅ♥

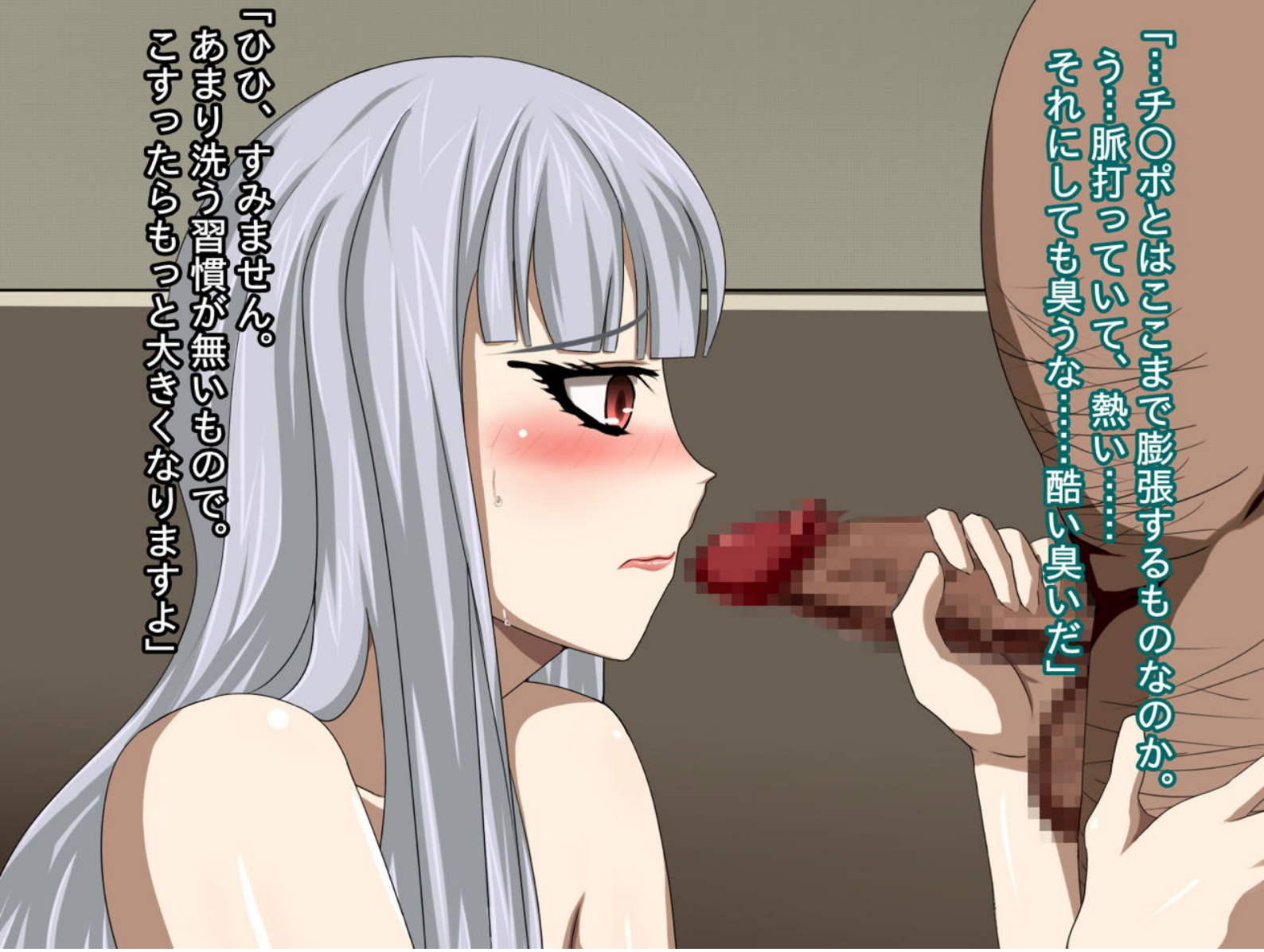
「任務とはいえ、お前のような男にこんなところを舐められるのが気持ち悪くて……
あぁ、本心とはいえすまない。
お前も仕事でしているのに……」
「……ちょっと激しくしますね」
ぢゅぢゅ♥
ぢゅぢゅ♥

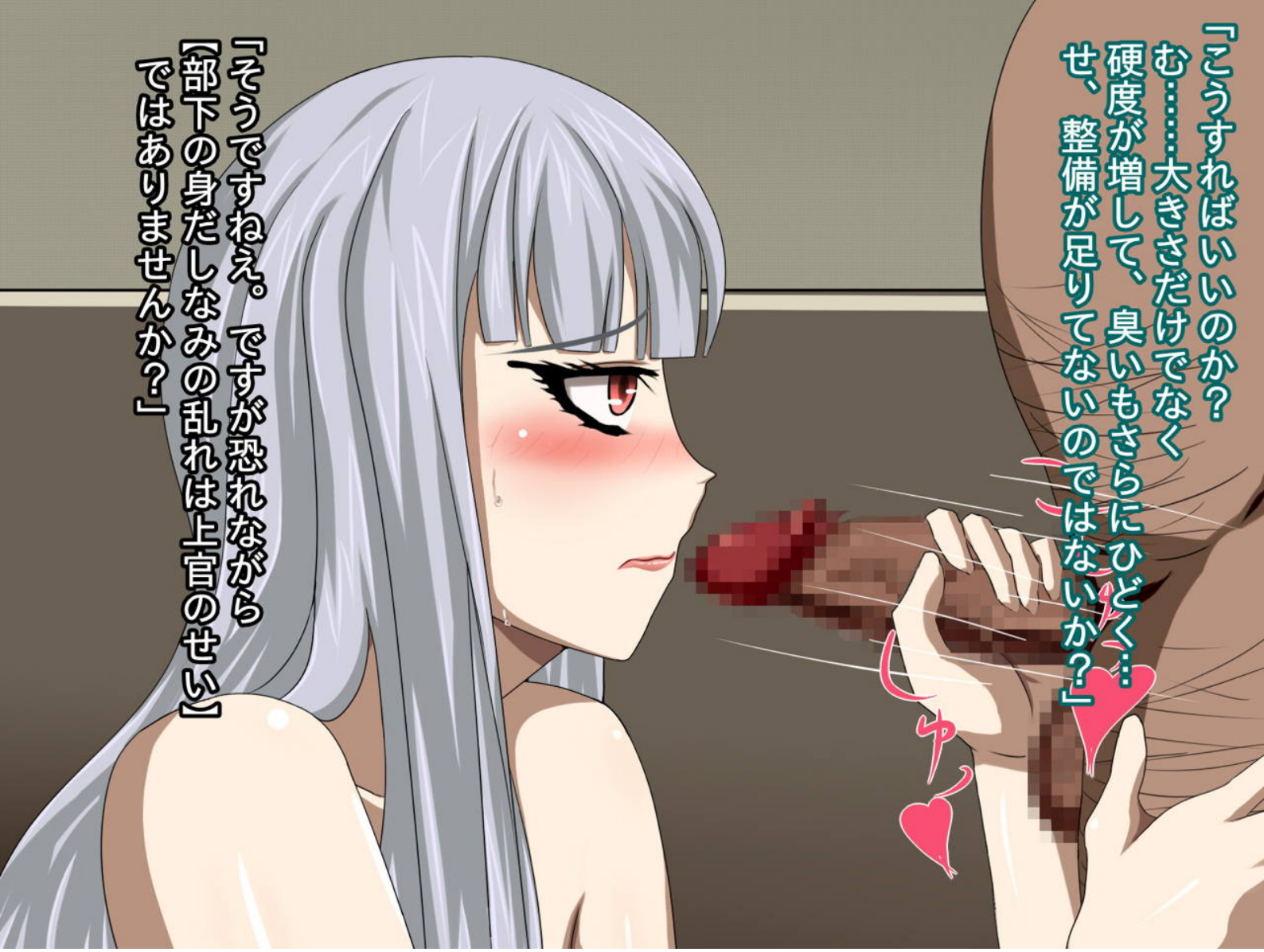
「はぁっ♥んんぅ♥そこっ…♥気持ちいいぞっ♥自分でも指でよく擦るところだっ♥」
「ははは、そうですか。じゃあ……」
ぐちゅ♥ぐちゅ♥

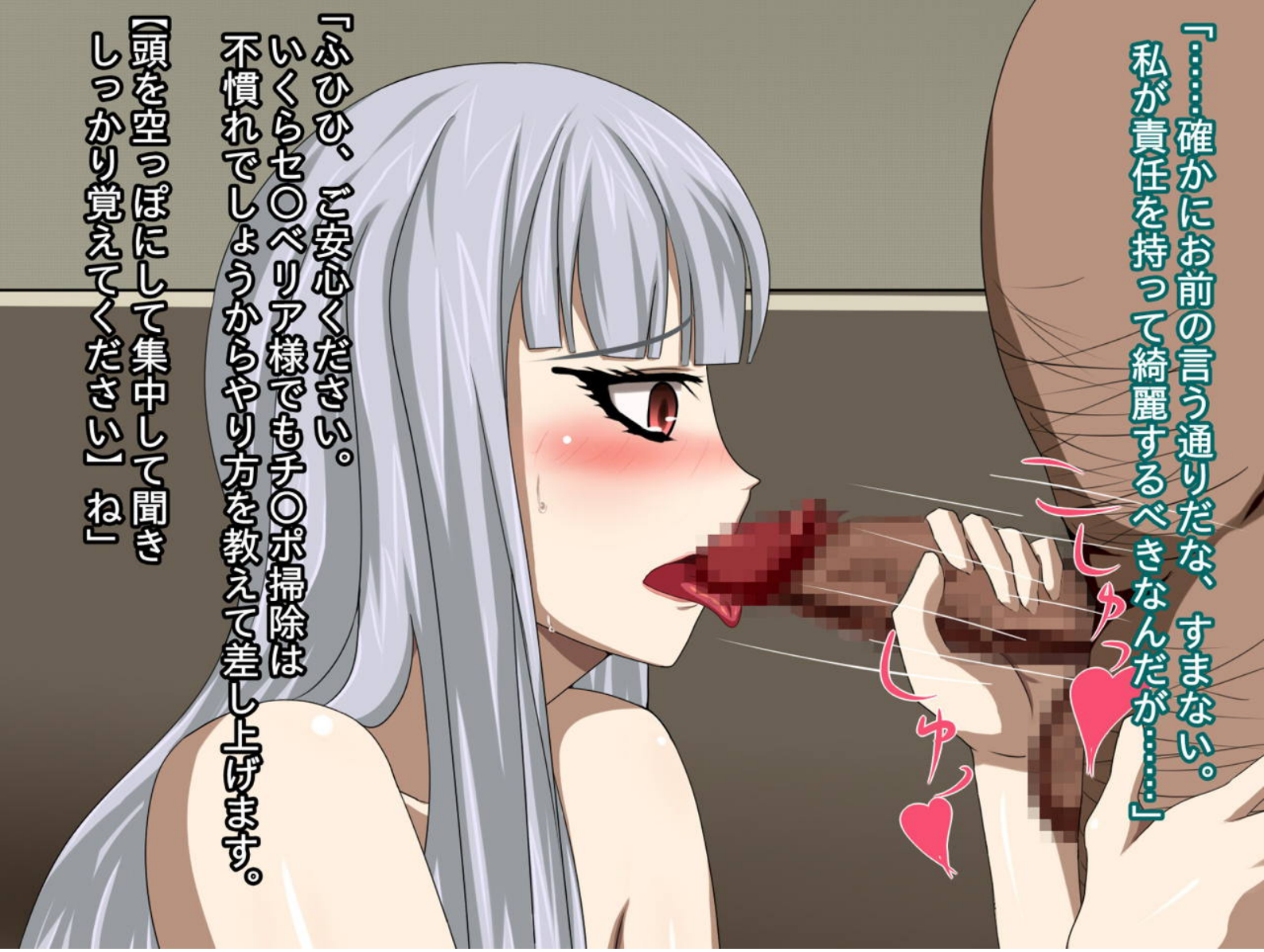
『こういうのはどうです！』
『はあああつ♥
ゆっ、指よりいいっ♥
吸われるのきもちいいいっ♥♥』
どう♥
ずちゅ♥

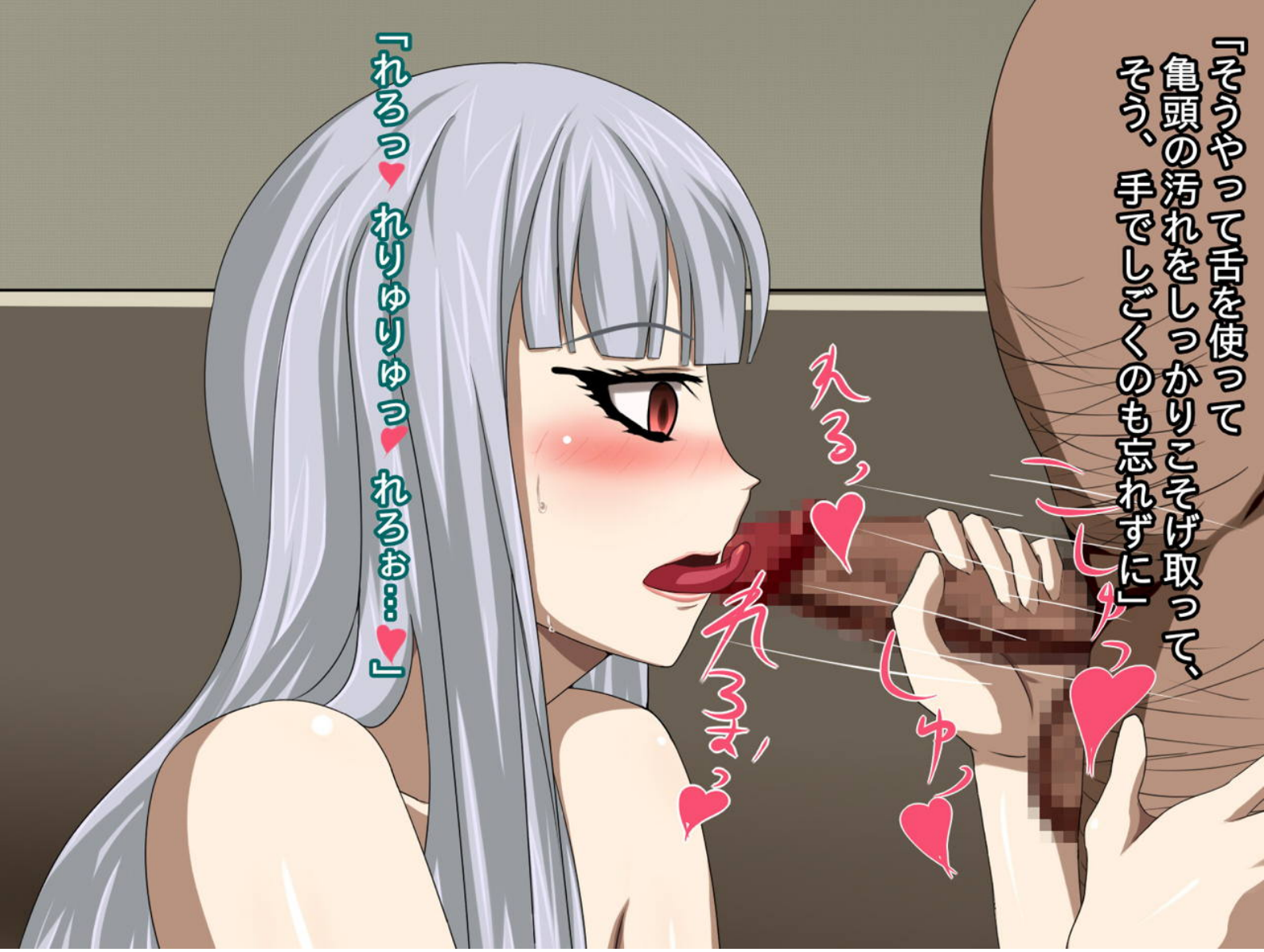
「はぁ…♥ はぁ～…♥」
「これでセ〇ベリア様のおマ〇コの弱いところがわかりましたね。かなり有益な情報じゃないでしょうか？」
「う、うむ、そうだな。有効に活用しろ……♥」
（ひひ、今に自分からねだるようにしてやるぞ）

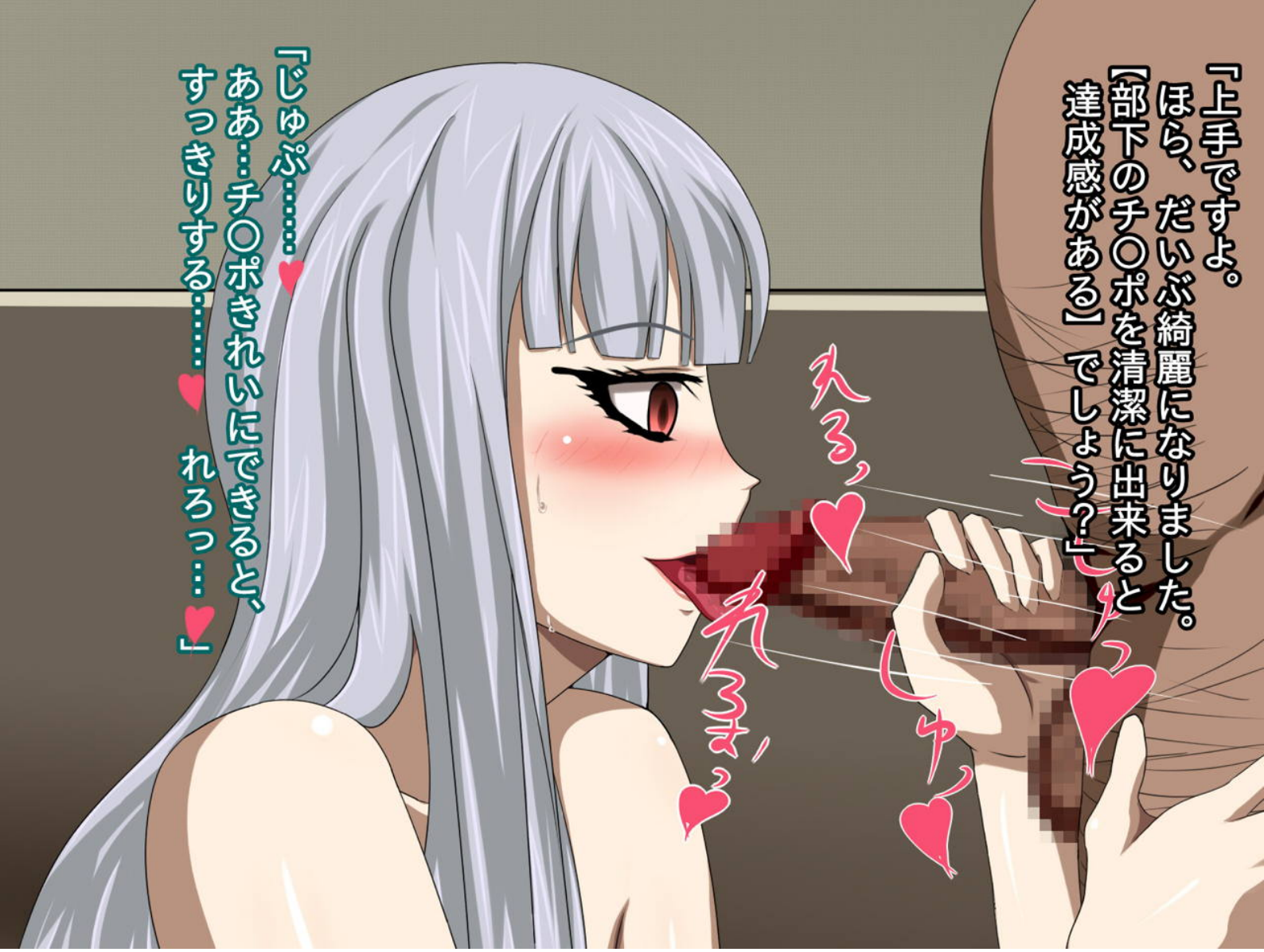

「じゃあ次は大佐に私の
【チ○ポカウンセリング】を
やって頂きたいのですが、よろしいですか？」
「む、無論だ。【部下のチ○ポのデータを
把握しておくのは上官の務め】だからな」


「…チ○ポとはここまで膨張するものなのか。
う…脈打っていて、熱い……
それにしても臭うな……酷い臭いだ」
「ひひ、すみません。
あまり洗う習慣が無いもので。
こすったらもっと大きくなりますよ」

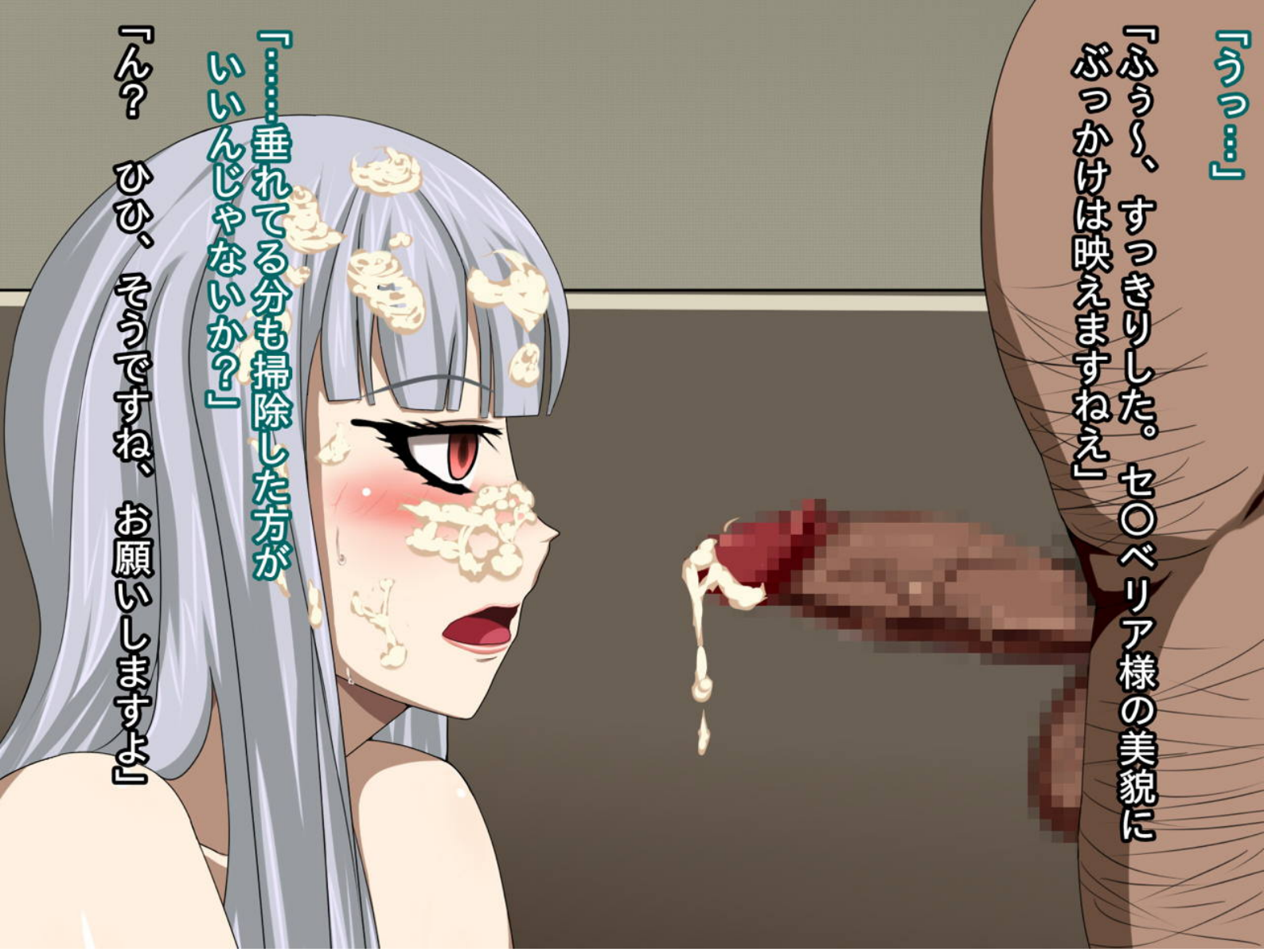

「こうすればいいのか？
む……大きさだけでなく
硬度が増して、臭いもさらにひどく…
せ、整備が足りてないのではないか？」
「そうですねえ。ですが恐れながら
【部下の身だしなみの乱れは上官のせい】
ではありませんか？」


「……確かにお前の言う通りだな、すまない。
私が責任を持って綺麗するべきなんだが……」
こしゅっ♥
しゅっ♥
「ふひひ、ご安心ください。
いくらセ〇ベリア様でもチ〇ポ掃除は
不慣れでしょうからやり方を教えて差し上げます。
【頭を空っぽにして集中して聞き
しっかり覚えてください】ね」


「そうやって舌を使って
亀頭の汚れをしっかりこそげ取って、
そう、手でしごくのも忘れずに」
こしゅっ♥
しゅっ♥
れろっ♥
れろまっ♥
「れろっ♥ れりゅりゅっ♥ れろぉ…♥」


「上手ですよ。
ほら、だいぶ綺麗になりました。
【部下のチ○ポを清潔に出来ると
達成感がある】でしょう？」
ぺろっ♥
しゅっ♥
れろっ♥
れろっ♥
「じゅぷ……♥
ああ…チ○ポきれいにできると、
すっきりする……♥ れろっ…♥」

「それはよかった。
じゃあ最後の仕上げするんで
ちょっと離れてください」
「わかった……」


「うっ…」
「ふぅ～、すっきりした。セ○ベリア様の美貌にぶっかけは映えますねえ」
「……垂れてる分も掃除した方がいいんじゃないか？」
「ん？　ひひ、そうですね、お願いしますよ」

「そうそう、【顔についた精液はザーメンパックでチ○ポカウンセリングが成功した証。誇らしい勲章のようなもの】ですから、気にせず今日一日そのままで大丈夫ですよ」
「…ザーメンパックは……勲章……」

「さすがセ○ベリア大佐、チ○ポカウンセリングも
初めてとは思えない手際でザーメン絞り出してお見事でした」
「お前もマ○コカウンセリングご苦労だった。
ザーメンパックは有難く受け取っておこう」
(ははは！　ぜひその勲章を基地中に
見せびらかして回って欲しいもんだ)

その夜

「……こんな時間に寝室に押しかけて何の用だ？」
「いやあ、大した用ではないんですが……」
「急を要する事でないなら、明日にしろ」
（チ○ポカウンセリングで少しは慣れた気がしたが
やはりこの男のことはどうも好きになれない。
何かが引っかかる……）

「まあそう言わずに、ほらこれ見て
【落ち着いて何も考えないで下さい】」
「っ!? それは……!」
(そうだ! 前にもこの光を浴びて…くっ…
あたま……なに…も……)

『……』
「ひひ、昨日より暗示状態に落ちるのが早くなりましたね。
慣れてきたら自然と命令を受け入れたくて
媚びるようになれますよ」

「セ○ベリア様のような大人の女性が
そういう赤ちゃんのような服を着ると
成就した身体とアンバランスさがいいですねえ。
さて、まず【今している体勢や格好は
何もおかしくない、普通の状態】ですよ」
「……ふつう……おかしくない……」

「そうです。【セ○ベリア様は今から四歳の頃の自分に戻ります】」

「【そして目の前にいる男の人がセ○ベリア様の大好きなパパです】。いいですね？　これからだんだん意識がはっきりしてきますよ」

『んぅ……』
『おはよう、セ○ベリア』
（あれ？　えっと、このひと……）
『……パパ！』
（そうだ、わたしのパパだ。
だいすきなパパなのに
どうしてわかんなかったのかなぁ）

「今からおねしょせずにねんね出来てたか
パパが見てあげるから
おマ〇コくぱくぱしましょうね～」
「お、おねしょなんてしないようっ
そんなとこみちゃいやぁ……」

『ん～？　でもほら、何か垂れてきてるよ？』
「え、あ…あれ？　どうしてぇ？
パパにみられてると、おまたがなんか
へんなかんじになって…おしるがとまらないの……」

「う～……おしっこがまんできなくて
ごめんなさい……パパ、おこってる？」
「ひひ、だいじょうぶ。怒ってないよ」
「……ほんと？」
「うん。その汁本当はおしっこじゃないからね。
それはマン汁って言って、セ○ベリアが
とってもエッチな女の子だから出たんだよ。
パパはセ○ベリアがエッチな子で嬉しいよ」

「よかったぁ……じゃあわたしもっとエッチになって
いっぱいまんじるもらすねっ♥」
「はは、そうか、偉いなあ。
セ○ベリアは本当に頑張りやさんだね」
「えへへ…」
（パパに褒められた！）
「じゃあそんな頑張り屋さんのセ○ベリアに
もっとエッチになれるご褒美をあげるよ」

『ほ～ら、ご褒美のオチ○ポ注射だよ』
『うう、おちゅうしゃいたいからいやぁ…』
じゅぷ…♥
『この注射は全然痛くないから大丈夫だよ。
ほら、おマ○コに入っても痛くないだろう？』

「奥まで全部入ったけど、痛くなかったろう？」
「ほんとだぁ、おちんちんささってるのに
ぜんぜんいたくない。へんなの～。
これでえっちになれるの？」
ずちゅっ♥
「そうだよ、これからオチ〇ポ動かして
どんどんエッチにしてあげるからね」

『はぁっ♥ふあああっ♥
おちんちんあつくてっ♥
おまたじんじんするのがきもちいいっ♥
へんだよっ♥へんになっちゃうっ♥
わたしおかしくなっちゃったよぉっ♥♥』
ズプッ♡しゅぱ
ズプッ♡しゅぱ
「おかしくなっていいんだよ。
どんどんおかしくなってエッチになれば
もっともっ～と気持ちよくなれるよ」

「ほんとっ？　あはっ♥　なりたいっ♥
もっときもちよくなりたいよぉっ♥♥
もっとエッチにしてっ♥　おかしくしてっ♥
もっとおまたにおちんちん注射してぇっっ♥」
ズプッ♡
ズプッ♡
「ひひ、いい子だね。でもおまたはおマ〇コ、
おちんちんもオチ〇ポって言おうね。
その方がエッチで頭悪い女の子らしくて
パパもっともっ～とセ〇ベリアが好きになるよ」

「うんっ、わかったっ♥
エッチなわたしのおマ○コに
パパのオチ○ポちゅうしゃいっぱいしてっ♥♥」
「いいよ～、それっ！」
「ひっ♥んふっ♥
あひっ♥パパだいすきっ♥
パパもわたしのことっ♥
いっぱいすきになってぇぇっ♥♥」
ふぅ♥
はぁ～♥
ズプッ
ズプッ
しゅぱ
しゅぱ

「パパはセ○ベリアのこと
元から大好き、だよっ！」
「あひゅっ♥
しゅごいいいっ♥♥♥」
ぷるぷる♥
ぷるるる♥
ぷしゃっ♥
「ひひ、その間抜けなイキ顔見て
もっと好きになっちゃったよ」

「今セ○ベリアのおマ○コに一杯入った汁の名前は
ザーメン、これがお腹の中にかけられて
すごく気持ちよかっただろう？
その気持ち良いのをアクメって言うんだよ」
「あくめ……♥
わたひ…あくめ、だいしゅきぃ……♥」

「そう、セ○ベリアはアクメもザーメンも
オチ○ポもみ～んな大好きな
エッチな女の子になるんだよ」

「うん、わかったぁ……
でも、ぱぱのことがいちばんだいしゅきぃ……♥」

「それは嬉しいなあ。でも今は【暗示状態に戻って
パパの顔を忘れてください】」

代わりに【子供の頃から毎晩、パパに
言われたようなエッチな子になろうと欠かさず
オナってたのはよく憶えています。
これはセ○ベリア様の秘密の習慣です】。

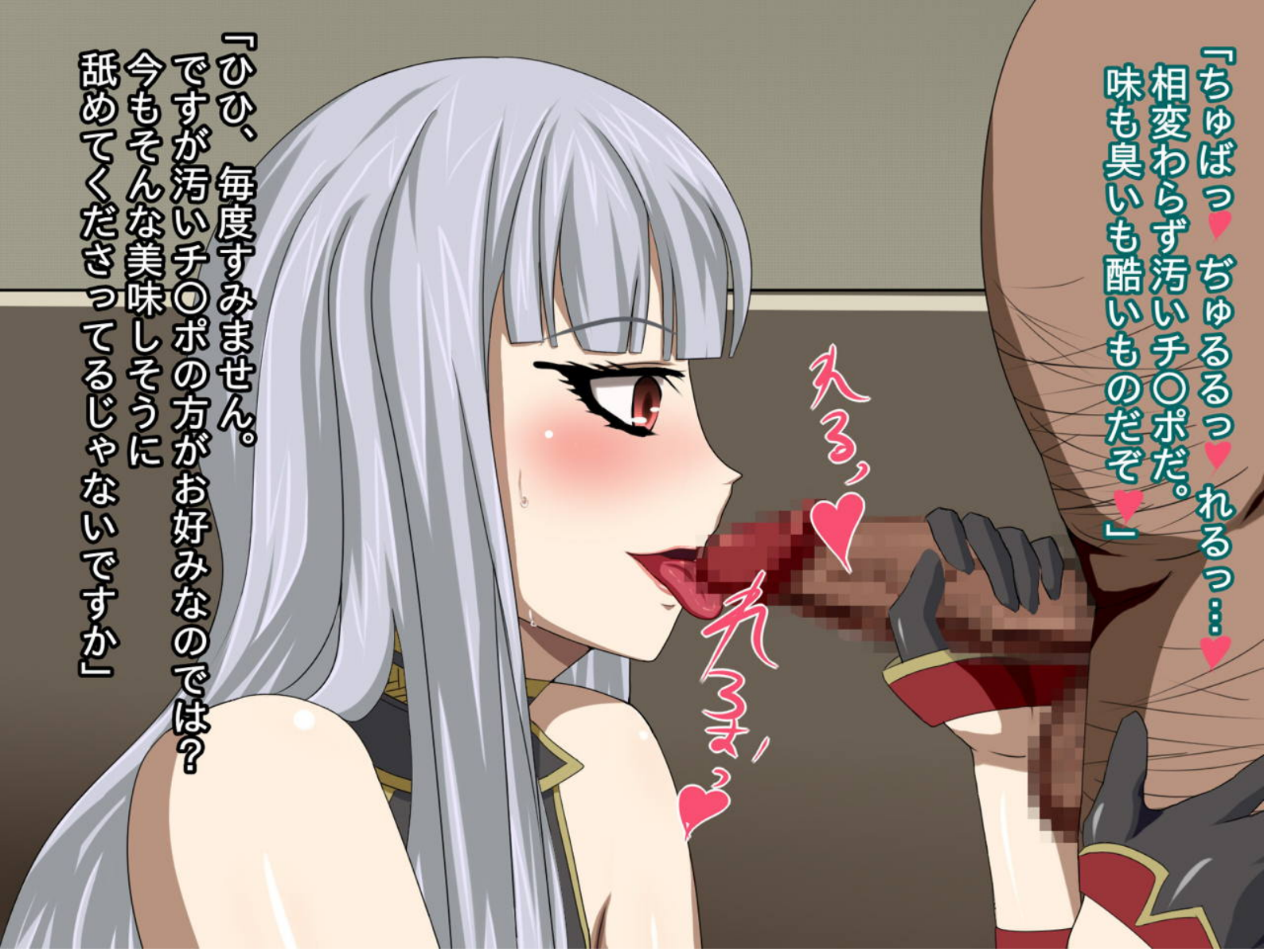
ひひ、この記憶で立派な変態ビッチに
なれるよ、セ○ベリアちゃん」

数日後

「おはようございます、セ○ベリア大佐」
「ああ、●●●中尉か。おはよう」
（何故だろう、以前ほどこの男に不快感を覚えない。
いや…それどころか好ましくすら思えてくる）

「じゃ今日もチ○ポカウンセリングしてもらえます？
毎日抜いて貰ってるのに、すぐ溜まっちゃって」
「そ、そうか……まったく、仕方のない奴め。
だが【副官のチ○ポ管理は上官の務め】だからな♥」

「またこんなにチンカスを……
昨日ロマ〇コで掃除したばかりなのに、
たるんでいる証拠だぞ」


「ちゅばっ♥ ぢゅるるっ♥ れるっ…♥
相変わらず汚いチ○ポだ。
味も臭いも酷いものだぞ♥」
れろ♥
れろれろ♥
「ひひ、毎度すみません。
ですが汚いチ○ポの方がお好みなのでは？
今もそんな美味しそうに
舐めてくださってるじゃないですか」

「ちゅぷぷっ♥れりゅっ♥れろぉ…♥
……勘違いするな、お前のチンカス処理は
あくまで職務でやっているにすぎない」
（そう、私はチ〇ポが好きなだけだ♥
ただ好物のチ〇ポを綺麗にできることは
嬉しいし、おマ〇コに入れてもらうためには……）
れろっ♥
れろれっ♥

（……何だ？　何かがおかしい気がする。
何か大切なものを失っているような……）
「やあ綺麗になりましたね。
とりあえず掃除はそれぐらいでいいですよ。
今日は顔じゃなくて、マ〇コの中に
ザーメンかけさせてください」
「む……そうか」
（残念だ、ザーメンパックされたかったのだが……
だがおマ〇コにチ〇ポを入れられる喜びには
代えられない。【私は子供の頃から
これが大好き】だったのだから♥
……？　さっき何か考えていたはずだが……
まあいい。今は職務に集中しなければ）

「ムチムチしていて
いいお尻ですよねえ。
セ〇ベリア様は本当に
エッチな身体をお持ちだ」
「ふ、ふざけた口をきくなっ♥」
（ああ…♥ パパに似た雰囲気を持つこの男に
褒められると、つい顔がほころんでしまう♥）

「ひひ、これだけエロい身体なら
恋人のカ●ルくんとはさぞかし
やりまくってるんでしょうねえ」
「見くびるな！
私は女である前に軍人だ。
【女性将校は副官以外と性的な行為を
行ってはならない】という軍規を破りはしないっ！
いかにマ○コが疼きチ○ポでハメて欲しくなろうと
カ●ルには指一本触れさせるつもりはないぞ！」

「ふひひっ…失礼しました。。
ではセ〇ベリア様のご覚悟に敬意を表して
私も大佐を孕ませるぐらいの気合を込めて
チ〇ポ突っ込ませて頂きましょう！」
「う、うむ……その意気だ。
私のエロマ〇コを
お前の臭いザーメンで満たしてくれっ♥」

「んっ♥　ふっ♥はぁっ♥はー♥
いっいきなり激しく動かし過ぎだっ♥」
「そうですか？
しっかり濡れてたから
飛ばしていいかと思ったんですが……
じゃあペース落としましょうか？」

「当然…だっ♥
【いついかなる時もチ〇ポを
受け入れられるようすぐ発情出来る
マ〇コ】であるよう訓練しているのだからなっ♥
女性将校の基礎中の基礎ひゃっ♥」
ずぶっ♥
ぬぷっ♥

『そんな決まりがあるとは知りませんでしたねえ、ひひ。お……そろそろ、射精しますよ！』
ビクビク
「あひゅうううっ♥♥」
ひくひくっ♥
ひくひくっ♥

「ふう、すっきりした。
今日も具合のいいマ〇コでしたよ」
「はぁ…♥ はぁ…♥
お前のチ〇ポも素晴らしかったぞ♥
こんな濃厚なザーメンをありがとう♥
これだけ沢山だと、あとで【避妊のために
マ〇コザー汁を飲み干す】のも苦労しそうだ……♥」

さらに数日後

「ああ、●●●中尉か。どうかしたのか？
チ○ポ処理ならマ○コの用意をするが……」
（ひひ、赤ちゃん用の胸も股間も全部丸出しの服なのに
本人は当たり前の格好と思って対応してくるから笑える。
しかし色々暗示かけて遊んだおかげで
最初よりだいぶ当たりが柔らかくなって変態行為も
下品な言葉遣いにも馴染んできたな）

「いえ、別件ですが……大佐にしてはずいぶん可愛らしい寝間着ですねえ」
「う…似合わないのはわかっているが、子供の頃からの習慣で……わ、私の服の事はいい。それより用件は何だ？」
（くく、似合う似合わないの問題じゃないだろうに）

『今後の【排泄行為の仕方】を教えて差し上げようと思って』
『はいせ…どういうことだ？』
『大佐は【トイレの使い方を知らない】んですよ。
【習った覚えがない】でしょう？』
『……ああ、そうだ…そうだった…わからない……』
（言葉のトーンだけで指示が出せるようになったし
すっかり暗示を受け入れてしまう身体になっちゃってまあ）

「そうだ……トイレの使い方もわからない……
うう…どうすればいいんだ……」
（ははは！　あの大佐がここまで
間抜けになるんだからたまらないな！）

「それをお教えするために
来たのですから、ご安心ください」
「そ…そうか、助かった……ありがとう。
副官とはいえ、こんなことまですまないな……」
うぅ……何故私は…自分が情けない……」

「まずはおむつで排泄を出来るだけ我慢する
ことを身体で覚えましょう。
いきなりトイレを使うのは難しいでしょうからね。
普通の大人なら当たり前にできる事ですけど」
「くう……わ…わかった」
「どうしても我慢できなくて出したくなった時は
私に許可とってくださいね、ひひっ」

「……●●●中尉。その……出してもいいだろうか？」
「おしっこですか？　うんこですか？
申請は形式に則ってハッキリお願いします」
「……お、おしっこだ」
「おむつの中に、おしっこを漏らしたいんですね？
恥ずかしくてもちゃんと口に出してもらわないと」
「そうだっ！　おむつにおしっこ漏らさせてくれ！
頼むぅ…もう、限界なんだ……！」

「仕方がないですねえ……
いいですよ漏らして」
「ああっ！　ありがとう！
んっ…♥　はぁぁぁ……♥　やっと出せたぁ……♥」
「ひひ、だいぶ溜まってたみたいですね」

「ふーん、やっぱりおむつだと垂れてこないんですねえ。
でもさすがに小便臭いなあ……」
「す、すまない……」
「まあしょうがないことですけどね。
だけど、いい年してまだおむつに頼ってるなんて
恥ずかしいことだってちゃんと自覚して下さいよ」
「うぅ……わかっている。
お前の手を患わせないよう、善処する……」

『ふぅ……結局今日だけで3回も漏らすなんて信じられませんよ。こんな赤ちゃんみたいな大佐がいるなんて我が軍の恥ですねえ』
『……』
もわぁ…♥

「うぅ……返す言葉がない、本当にすまない…」
「謝られてもねえ……
で、この汚いおむつを取って欲しいんですよね？
でしたら、それなりの頼み方がありますよね？
ちゃんとご自分の恥ずかしさを自覚してると
私にわかるように仰って下さい」
もわぁ…♥
「お…お漏らしするような、みっともない大佐で
ごめんなさい……
おしっこまみれの……臭くて、汚いおむつを
どうか外して下さいい……♥」
（ひひ、へりくだるのに抵抗しなくなってきたなあ）

「わかりました、外す最中に漏らさないで下さいよ？　ひひ……
おや、どうも小便以外にも漏らしてるみたいですねえ」
「こ、これは……」

「まさかおむつ代えてもらって興奮したんですか？驚いたなあ…セ〇ベリア大佐が恥ずかしい姿見せて興奮する露出狂のマゾだったなんて……」
「うぁぁ…言わないでくれぇ…♥」
（ひひ、言葉で辱められて更に感じてやがる。暗示の効果もあるとはいえ、変態快楽に馴染んできたなあ）

「さすがセ○ベリア様ですね！
女性将校の任務をこなすために生まれたような
売春婦以下の変態女じゃないですか！
尿道の締りの悪いお漏らし女だと
思っていたので見直しましたよ」
「そ、そうか？
ふふ　お前に受け入れられてよかった♥
そう…幼いころ父にもエッチな変態女になれと
言われ、それを目指して訓練に励んだものだ♥」
（っぶふっ！　この馬鹿女の中で一体記憶は
どうなってるんだかな！）

「じゃあお父様も娘が立派な変態になってさぞお喜びでしょうね、ひひっ……
そうだ、変態になりたいのでしたらこのおしゃぶりを使うといいですよ。
【これはしゃぶってると私のザーメンやチンカスの味がしてきて、しゃぶればしゃぶるほど美味しく感じるようになる上にマ〇コを舐められてる感覚がする】んです。
今よりもっとチ〇ポ好きな変態になれますよ」
「変態に……♥」

「んぷっ　ありがとう♥ひゃっひょく♥
ひゅかわひぇてもらうひょっ♥ちゅぽっ♥」
「ひひ、大事に使って下さいね」

「おむつを外す許可をくれたのは嬉しいのだが……その…
これでは何かの拍子にめくれたら、全て見えてしまう……」
「そうはいってもまだ漏らす危険はありますし、
パンツを濡らしたら大変でしょう？
それともおむつに戻ります？」
「い、いや！　これでいい！
それで今日からはどうやって用を足せばいいのだ？」
「そうですね、まず服を全部脱いでください」

一週間後

「……ほ、本当にこれにしないと駄目なのか？」
（おむつよりはマシだが、こんな子どもの使うおまるで……）
「そうです、段階を踏んでいかないとね。
なにせ赤ん坊同然のおむつから始めたんですから。
次はおまるという訳です。さあ、始めて下さい」

「……セ○ベリア・ブレス大佐……
臭い…う…ウ○コをケツ穴からひり出す許可を願う……」
（あぁ…部下に排泄行為を管理されないとまともに
生活できないとは、なんて惨めで情けないんだ……♥）
「どうぞ、好きなだけ出してすっきりして下さい」

「んんっ…　ふんっ～～！　はぁ…はぁ……
ふんうっ～！」
「結構詰まってる感じですねえ。
まあかれこれ……何日してないんでしたっけ？」
「ふぐうっ…はぁ……よ…4日だ……」

「そうそう、おむつにも結局一回しませんでしたね。
あれってやっぱり我慢してたんですか？」
「……元々っ…便秘気味で、んぐっ…、困ってる…んんっ～っ」
（何故こんな無礼な質問にも律儀に答えてしまうのか
自分でもわからない……そもそも何故私はこんなことを……）
「お、頭出てきましたよ、ほらもっといきんで！」

「ふんっ～！　ぐうっ～～～～！」
（もちろん【トイレの使い方も知らない】私に教えるためにやってくれているのはわかっている。だが何故こんな変態じみたやり方で……くっ…確か前にも同じことを考えて……）
「いやあ、セ〇ベリア様みたいなお美しい女性でもこんな臭いのをいっぱい溜め込んでるんですよねえ。しかしまあ、私ならおまるでクソしてるとこなんて見られたら死にたくなりますけど、恥ずかしくないんですか？」

「んん～っ！　はぁ～……♥　はぁ…♥
は、恥ずかしいに決まってるだろう♥
だが……♥」
（ああ、そうだった。何も不思議じゃない。だって私は……）
「視姦られて、蔑まれて悦んでしまう
マゾの変態女なのだから、むしろ本望だ♥」
（パパに愛されるような変態女になるためにも、当然のことだ♥）

「ひひ、そうですか。
しかし、これでおまるの扱いはバッチリですね。
人並みにトイレ出来るようになるまであと一歩ですよ。
さすがセ〇ベリア様は覚えが早いですね」
「あ、ああ。お前のおかげだ、ありがとう♥」
（やはり●●●はパパに似ている……
この男に褒められると嬉しくてたまらない♥）

数日後

『大佐はムチムチのデカ尻も魅力的ですが、
やはりこの爆乳が最高にエロいですねえ。
一般兵の間でも「一度でいいから揉んでみたい」
って大人気なのご存知でしたか？」
「い、いや、そうなのか……
自分では大きすぎて恥ずかしく思っていたのだが
【性欲の対象にされているのなら光栄】に思う♥」

「そう、誇っていいんですよ、ひひ。
さあ今日はこのご立派な胸を使って
パイズリをやって頂きましょうか。
……と言っても最初は力加減も
わからないでしょうから、このデカパイで
好きにオナらせてもらいますね」

「しかしホントはしたない爆乳ですね。こんなの揺らして歩かれちゃ堪りませんよ。
最大に勃起してやっとチ○ポが顔を出す……おや、舐めてくれるんですか？」
「れるっ♥ れろろっ♥ ぢゅぱぁ♥
う、うむ。ザーメンをしっかり射精せるよう協力するのも上官の務めだからな！ じゅぷぷっ♥」

「はは、助かります。これはたっぷりザーメンをご馳走しないといけませんねえ」
「ぢゅぷぷっ♥ぢゅぽぉ♥れりゅりゅりゅっ♥ふょうひゃっ♥ふぁくひゃんひゃふんひゃほっ♥♥」

「ひひ、チ○ポ舐めながら言われても
なんて仰ってるのかわかりませんよ」
「ぢゅぽぷぁっ…♥ さ、さっさと射精せと言ったんだ！
まったく……黙ってチ○ポに集中させろっ♥ じゅぽぽっ♥♥」

「チ○ポ舐めの邪魔して失礼しました、ひひっ」
（くく、すっかりチ○ポに夢中だな。
こんなひょっとこ顔で吸い付く浅ましい姿を
恋人に見せてやりたいよ）

ずぶぶぶ
しゅぽ♥
ぐぽっ♥
むにゅーー♥

「へえ、勲章のザーメンパックより飲みたいなんてすっかりザーメンジャンキーですねえ。いいですよ、ほら！たっぷり飲めっ!!」
「んぶううっ♥♥」

「ふひ、チ○ポは美味しいですか？」
「ふぼっ♥ぢゅぷぷっ♥ちゅぷぅっ♥じゅぽぽっ♥ぢゅるるるっ♥♥」

「鼻ならして返事って、まるで豚みたいですねえ。
それにしても毎晩おしゃぶりで練習しただけあって
チ○ポしゃぶりがだいぶ上手くなりましたねえ。
そろそろ射精そうなんですが、このまま射精すのと
顔にザーメンパック、どちらがいいですか？」
「ほのふぁふぁっ♥ふぉむっ♥
ひゃーめんふぉみふぁいっ♥」

『ふぅ、出した、出した。
大佐、ザーメンのお味はいかがですか？』
『いかくひゃくて、ぷりぷりのこひゃねが
くちをおかひて……♥ひゃいこうひゃっ♥♥』
『うわ、まだ口の中ザーメンで
いっぱいじゃないですか。
汚いなあ……
食べ終わってから喋ってくださいよ、ひひっ』

『はは！　あんまりパイズリフェラが気持ち良いんで
いつもより沢山射精てますね！
せっかく出したんだから全部飲んでくださいよ！』
『んぶひゅっ♥わかっひゃっひぇふゅ…♥』

「けぷっ…♥すまない。美味しさに感動するあまり、つい……
ふふっ、○○○中尉、素晴らしいザーメンをありがとう」
「大佐のデカパイや口がいやらしかったおかげですよ。
もうチ○ポのためにある性器、乳マ○コと口マ○コと
呼んでもいいぐらいです」
「乳マ○コに口マ○コか……♥
いい名称だ、光栄に思うぞ。ありがとう♥
これからもその名に恥じぬようマ○コ
乳マ○コ、口マ○コを駆使してチ○ポに尽くそう♥♥」

「うぅ…落ち着かない……
ほ、ホントにこれを着けて
過ごさないといけないのか？」
「そうです、ケツ穴もマ〇コに
するために欠かせない訓練ですよ」

「そうか、【訓練】なら仕方ないな。しかし……尻穴までマ○コになってしまうのか……♥」
「ひひ、嬉しいでしょう？じゃあ早速やってみましょうか。無理はしなくていいので手で引き抜けるとこまで抜いて下さい」

「はぁ…はぁ……ぐぅっ！
んふぅ……は～……」
「はは、無理しなくていいんですって。
今はそこが限界みたいですね。
とりあえず戻して下さいよ」

「んんっ♥　はぁ……♥
はぁ…妙な感覚だ♥」
「ひひ、どうもセ〇ベリア様は
出すより入れる時の方が
お好きのようですねえ」

「うむ…♥ 特にめくれたケツ穴が
戻っていく時の刺激が……♥」
「ひひ、これからは毎晩ケツ穴でオナって
しっかりほぐれてケツマ〇コになるまでは
ずっとそれを入れて生活してくださいね。
下着もそれように出し入れが
便利なものを用意しましたよ」
「何から何までありがとう、〇〇〇中尉♥」

数日後

「どうしたんですか？　ずいぶん慌てているようですが」
「さ、さっき風でスカートがめくれて
巡回中の兵士にこの下着を見られてしまったのだ！
ひょっとするとケツ穴に入れてるものまで……
あぁ！　どうすればいいんだ……」
（へえ、あれだけ堕ちても羞恥心はそこそこ残ってるのか）
「ひひ、皆に大佐がこんな変態だって知ってもらえて
よかったじゃないですか。
それより私にもそのスカートの中が
どんな風になってるのか見せてくださいよ」

「おお、ケツ穴だいぶほぐれてきましたねえ。
道具抜いても閉じきれずにヒクヒクしてますよ。
まあ確かに、このお尻を見たらびっくりするでしょうね。
下着もいっそ着けてないほうがマシなくらい、卑猥なものですし」
「も、もうその話はやめろっ！　それより……」

「私のケツ穴、いや…ケツマ〇コに
早くチ〇ポを挿れて鍛錬の成果を試してみろっ♥」
「ケツ振ってアピールするとはセ〇ベリア様もも
ケツマ〇コの仕上がりに相当自信がおありのようですね」
（チ〇ポ好きになってきたのもあるだろうけど
軍人気質の大佐のことだ。毎晩クソ真面目に職務を果たすべく
ケツオナでアナル開発に励んだんだろうな、ひひひ）

「んふっ♥ んんっ♥ ふぅっ…♥」
「ん～、やっぱりマ○コよりキツめですねえ。セ○ベリア様の方はいかがです？道具とチ○ポ比べて」
「ふっ♥ふといっ♥チ○ポの方が、太くて熱くてっ……　きもちいいっ♥」

「んふぅっ♥！　ふ～♥ふぅ～…♥」
「さすがに根元までいくと苦しそうですねえ。
穴も凄い拡がってますよ。
元に戻らないからもしれないけど
これなら便秘に悩まされることも無くなりますよ、ひひっ」

「さて、ここからはスピードあげてきますよ！」
「あっ♥ふっ♥んふっ♥んんっ♥はぁんっ♥いいっ♥」
ぢゅぽっ♥ぬちゅ♥ぐちゅっ♥
パンッパンッ

「セ○ベリア様も余裕が出てきましたね。
見てて恥ずかしいくらいスケベな顔になってますよ」
「んっ♥ だってっ♥ ケツマンよすぎるんだぁっ♥
それにおまえだって ちんぽっ おおきくっ♥
あひっ♥ おおきくて♥ きもちいいっ♥♥」
（くく、ケツ振ってチ○ポ受け入れるのに
夢中で頭使えなくなってやがる）

「まあ確かにこちらも楽しませて貰ってるから
お互い様ですね。
それじゃケツマンに初中出しですよ！
ケツマンアクメ決めちゃってくださいっ！」
「あひゅううううう♥」

「んはぁ…♥
あついのが…おなかにいっぱいだ……♥」
「浸ってるところ悪いんですけど
ケツマ○コに突っ込んでチ○ポが
汚れちゃったんで、口で掃除してもらえますか？」

「ああ、任せてくれ♥
あぁっ♥ザーメンまみれのチ〇ポ♥♥
ぢゅぷぷっ♥れろっ♥ぢゅぱぢゅぷっ♥
なんてくひゃいんだっ♥」

「臭いのはセ〇ベリア様の
ケツマンコのせいじゃないですか？
ウ〇コが残ってたのかも」
「ぢゅぽぽっ♥ ぢゅぷぱぁっ♥
朝に沢山ウ〇コしたばかりだから
私のケツマンコのせいではないぞっ！
お前だって見てくれてたんだから
わかっているだろうにまったく失礼な奴め♥
ぐぽぽっ♥ ぢゅぽぢゅぽぽっ♥♥」
（はは、臭いと言われるのにもまだ恥じらうんだな。
次は自分のニオイでも興奮して
マン汁垂らすようにしてやろうか……）

一週間後

「今日は外で小便しましょう。
きっと【開放感があってマ〇コが疼くほど
気持ち良い】ですよ」
「…かいほうかん……きもち、いい……」

「今日はついにおまる無しでトイレに挑戦ですよ。
これが出来るようになれば、いつでもどこでも
ウ○コでもおしっこでも自由に出せますよ」
「……う、うむ。楽しみだ」
（やっとおまるが卒業できるのは嬉しいが。
少し寂しくもあるな……）

「ん……♥」
（外でも出来るように慣れれば安心だ。
おまるは持ち運びが不便で我慢しなければ
いけなかったし……
裸でするのにも少し抵抗もあったが、これなら
【ちゃんと手袋とブーツを身につけているから
誰に見られても大丈夫】だからな。
……恥ずかしくはあるが）

「ふぁぁ～……♥」
（それにしても……
外でするのがこんなに気持ちのいいことだなんて♥
空気がいいのだろうか？
外でするのが癖になってしまいそうだ♥）

「すごい！　外でもちゃんと出来ましたね！
これでもうトイレトレーニングは終了ですよ。
おめでとうございます」
「ありがとう、これもお前のお陰だ」
（ああ、清々しい……今度はウ〇コを外でしてみよう。
きっと気持ちいいに違いない♥）

翌日

ザワ

ザワ

ザワ

「どうした？　何を騒いでいる？」
（まったく……我が部隊の練度は高いと思っていたが、これでは鍛え直してやる必要がありそうだ）
ガラ
ガラ
ガラ

「ん？　この格好は何なのかだと？
これは開発中の【女性将校用軍服】だ。
一見シールを貼っただけの裸同然の変態じみたものに
見えるだろうが、極限まで肌を露出することで敵の戦意喪失と
味方の士気向上、そして低コストを実現した逸品だそうだ」

『【肉便器任務での扇情性及び耐久性】を確認するため
これよりザーメンぶっかけテストを行う。
各員チ〇ポを取り出してセンズリを開始しろ！
射精の際は乳マ〇コかマ〇コに狙いを定めるように♥』

「む、どうした？　……何を言っている？
冗談などではない、軍の命令だ」
（反応が悪いな…仕方あるまい。
●●●中尉の言っていた
アレをやるとしよう）
「どうした、いつも私の淫乱な
デカパイを視姦てチ○ポを
硬くしていたのだろう？
ふふ、安心しろ。
叱責している訳じゃない。
私自身、お前達に見せ付けて愉しんでいたのだからな♥
ほら、こうやって揺らしてみたり……♥
よし、ようやく軍務にとりかかる気になったか。
さあ早くその勃起チ○ポから臭いザーメンを存分に射精せっ♥」

「はぁ♥はぁっ♥
い、いいぞお前達っ♥
その調子でもっと臭いザー汁かけてくりぇっ♥」
（ああっ♥身体中が腐ったチーズのような臭いで
いっぱいでマ〇コがぁ～っ♥♥♥
あふぅっ♥感じてるの気付かれて笑われてる……
そうだ♥もっと軽蔑の目で視姦てくれぇっ♥）

翌日

「うわっ、凄い臭いですねえ。
全身ザーメンまみれでシールも剥がされて
無茶苦茶やられましたね、ひひっ」
「あひっ♥」
「あらら、小便まで漏らして。
またトイレトレーニングやり直した方がいいかもしれませんね。
で、部下の肉便器になってテストした結果はどうでした？」
「…ひ…ひあわひぇぇ……♥」

（今日はご主人様と夜のお散歩だ。
犬の私は人間様と違って服を着られないから
ちょっと肌寒いけど、お散歩に連れてって
もらえるんだから贅沢は言えない）
「よし、ここらへんでいいかな」

「セ○ベリア、ここでおしっこしろ。
ちゃんと犬らしくやるんだぞ、ひひっ」
『わん！』
（ご主人様は何を言ってるんだろう？
らしくも何も私は犬なんだから
こうやるのが当たり前なのに）

（あ、あれ？　何でだろう？
いつもやってることなのに
上手く出せない……）
「どうした？　まさか出ないのか？
しょっちゅう我慢できずに漏らすくせに
許可したときに限って出せないなんて
どうしようもないやつだな」

（あああっ！　私は本当に駄犬だっ！
こんなんじゃ……）
『牛みたいに乳がデカくて盛りっぱなしの
恥ずかしいマゾ犬だし、トイレもまともに
出来ないなら捨てるしか無いかなあ」
『くっ、くぅ～ん……』
（いやだいやだ！
ご主人様に捨てられたくないっ……
おしっこ出てぇ……！）

（あっ♥ 出たぁっ♥）
「おお、勢い良く出すなあ」

「わんわん！」
（みてみてご主人様！
ちゃんとおしっこ出せてるでしょ？）
「ははは、そんな見せ付けなくていいぞ。
お前は馬鹿な犬だけど、そこがかわいいなあ」
（わーい、ご主人様にほめられたっ！）

『ん？　なんだ～この垂れてるのは？
セ〇ベリア、お前、
また自分のおしっこの臭いで発情したのか？」
『わ、わうぅぅ……』
（どうして私は【自分のおしっこやウ〇コ、汗の
臭い嗅いで興奮する変態牝犬】に
生まれちゃったんだろう……恥ずかしい……
うぅ、でもご主人様のおチ〇ポ欲しいよぅ……）

『しょうがないなあ。部屋に戻ったらハメてやるよ。
その代わり、部屋までそのままの体勢で歩いて
途中で人に会ったら、ちゃんと人間の言葉で
「プレイでやってる」って言って
よ～くマ〇コ見せて挨拶するんだぞ」
『わぅーんっ♥ はっ♥ はっ♥』
（うれしいっ♥ ご主人様はなんてやさしいんだろう♥
ああっ♥ 早く部屋に戻って
いっぱいハメてもらいたいなぁ♥
それで最後にオチ〇ポ
掃除させてもらうんだっ♥）

数日後

新しい軍服のテスト参加者や自分を変態牝犬と思い込ませて遊んでるところを目撃した兵士達のお陰でセ〇ベリア大佐は変態痴女だという噂が立った。

笑えることに本人はそれを恥ずかしがりながらも【大好きなパパ】に言われた通りの存在になれたと誇りに思ってさえいる。そして兵士に蔑まれることでマゾ快楽まで満たしている始末だ。

俺の復讐は大成功と言っていいだろう。

さて、ここからどうしようか。

これまで暗示で忘れさせたり、意識させなかったことを思い出させて遊ぶか。

あるいは今の歪んだ認識をさらに捻じ曲げて完全な肉便器に貶めてやるか……

「……いいですか、しばらく意識の外に置くよう指示した【恋人のカ●ルくんのことが気になって恋しくなります】。あと最近、大佐が変態だと噂になっていますよね。【そのことで彼に真実を知って欲しくなります】。
「カ●ル……恋しく……知って…ほしい……」
「そうです。そして……」

（……ん？　私は何を……）
「……大佐、ご指示の通りカ●ル少尉に勤務終了後に大佐のお部屋に来るよう連絡しておきました」
「そうか、そうだったな……ご苦労」
（そうだ、カ●ルに会うんだった。考えてみればしばらく会っていないな。顔を見るのが待ち遠しい。今夜あの噂の誤解を解いて、そして……ふふ♥）

「失礼します。大佐、あの……なっ!?」
「ああ、カ○ル♥よく来てくれたな。
私が変態痴女だという噂を聞いたと思うが
アレは全て本当の事だ♥
最近会えなかったのも副官との相互性処理任務や
隊の肉便器としての務めで忙しかったからで
お前のことが嫌いになった訳じゃないぞ♥
見ての通り、マ○コもケツマ○コも毎日乾く暇が
無いほどザーメンを注がれているが、お前も……♥

「……噂の真偽を確かめようと思ってたんですけど、もうその必要はありませんね。……残念です。失礼しました」
「かっ、カ●ル？どうしたんだ？待ってくれ！カ●ル！」

『カ○ル……』

「昨夜はカ●ル少尉とヤリまくったんですか？　ひひっ」
「いや……そのつもりでお前に射精してもらったザーメンでいっぱいのマ○コとケツマ○コを見せて誘惑したのだが、怒って帰ってしまったんだ」
「【恋人以外のザーメンで満たされたマ○コとケツマ○コを見せるのは、ヴァルキ○リア人の最高の求愛行為】なのは常識なのに、変ですねえ」
「うむ……カ●ルは何が気に入らなかったのだろうか……」

「セ○ベリア様が想像以上に変態すぎて
引いちゃったんじゃないですかねえ。
まあ肉便器にはぴったりですけど、
やっぱり恋人には恥ずかしくて出来ませんよ」
「そんな……カ●ルに私がこんな変態女だということは
隠すべきだったのだろうか……
だが、子どもの頃からずっとこうなりたくて
それを受け入れて欲しかったのに……」

「まあカ●ルくんの愛情はその程度だったという事ですよ。
そんな薄情な男のことなんか忘れて、私の恋人になりませんか？」
「えっ……♥ そ、そんな…急に…いや、気持ちは嬉しいが……
わ…私のような変態でいいのか？」
「私はセ○ベリア様のような変態女も大歓迎ですし、
なにより私達のチ○ポとマ○コの相性はバッチリでしょう？
それって【恋人同士で一番大事なこと】じゃないですか」
「あ…ああ　そうだな……そうだ、カ●ルのチ○ポは
見たことすらないが、お前のチ○ポには何度となく
イかされたし、今ではその臭いを嗅ぐだけで疼くくらいだっ♥
お前がそう言ってくれるなら…♥　あっ!?　だが一つ問題が……」

「腋の臭いを嗅がせるなんて
妙な儀式があったもんですねえ。
ひひっ、ヴァ○キュリア人は
変態民族なんじゃないですか？」
「ふふ、そうかもしれないな♥
だが、それをやるお前だって相当な変態だぞ♥」
（あぁ……♥ ○○○に拒否されなくてよかった♥
やはりこの男は私の運命の……♥）

「それでこの蒸れ蒸れの腋にチ○ポをなすりつければいいんですね」
「うむ。ああ♥腋にチ○ポの熱が伝わってくる♥」
「興奮してるんですね？　ますます汗が出てきましたよ。腋までマ○コみたいに反応しちゃうなんてセ○ベリア様は本当に変態ですねえ」
（ふふ、●●●にならこんな変態でも受け入れてもらえるから詰られても怖くない……嬉しい♥　カ●ルとは大違いだ）

「よ、よし、チ○ポに腋臭が移ったら次はこの鼻フックをつける。
これは【ヴァ○キュリア人の女は変態のメス豚であり、恋人になってくれるオスには絶対服従する】という意味を表しているのだぞ」
(ちゃんと儀式のやり方をパパに教わっていてよかった。ん?そういえばカ●ルとはやっていないな……そうか、【心の何処かで奴を恋人と認めていなかったから】だ。ふふ、結果としてはやらなくて正解だったな♥)

「で、後は【チ○ポを鼻に押し付けて匂いで恋人にふさわしいか判断する】んですよね？本当に豚にふさわしい民族ですねえ」
「そっ、そうだっ♥　ああっ、焦らさないで早くお前のチ○ポを嗅がせてくれっ♥」
（この距離でも鼻を刺激してくるこの臭い♥　たまらないっ♥）

「せっかくだし、豚らしく鳴いておねだりしてくださいよ」
「なっ…ま、まったく……♥ しょうがないやつだな♥
ぶ、ブヒっ♥ ブヒっ♥
牝豚セ○ベリアに早くチ○ポ嗅がせてくれブヒぃっ♥」
「……ははははっ！ いいですよ、ほらっ
しっかり嗅げよ、メス豚！」
「ぶひぃぁぁんっ♥♥」

「どうです？　恋人になっていいですか？」
「も…もひろんひゃぁ……　あいしてひゅひょ……♥
ぶひっ……♥」
はーー♥
「そうですか、それはよかった。
私も愛してますよ、セ○ベリア様」
（うれひぃ……♥
チ○ポの臭いだけでイかされてしまっひゃ♥
やはり●●●はわたしのうんめいのだんせいひゃぁ♥）

数週間後

『ん～、よく寝た。
ああ、おはようございます、セ○ベリア様』
『おはようじゃない、もう昼前だ。
まったく、休日だからといって寝過ぎだぞ♥』
（刷り込んだ変態儀式で恋人になったあの日以来
自発的に部屋へ通ってくるようになったな。
【変態である自分を受け入れてくる愛しい男】
だと思い込んで、甲斐甲斐しく尽くしてくるから
おかしくてしょうがない）

「れろっ♥ ぢゅるるっ♥ ぢゅぴっちゅぷぷ♥
身体も生活もたるんでいるくせに
いつもチ○ポだけは硬くして……
お前みたいなやつは私の乳マ○コで
指導してやらねばっ♥」
（あの蒼い魔女と呼ばれ恐れられた大佐も今では
こちらから誘うまでもなく、こうやって
理由をつけては【恋人】の俺とじゃれ合おうと
してくる浅ましくもいじらしい変態女か、ひひっ）

「んっ♥ちゅっ♥ちゅぷっ♥ちゅぷぷっ♥
れろっれるっ♥れりょりょっ♥ぢゅるるるぅ♥
はあ…はぁ…♥毎日掃除してるのに
すぐチンカス溜まって、いつも臭いザーメンで
キンタマぱんぱんで……♥
こっ、こんな性欲過多な絶倫チ○ポ、
私みたいな変態豚じゃなきゃ
付き合いきれないぞっ♥」
(これも要は自分達がお似合いだという
アピールで愛情表現のつもりらしい。
植えつけられた自分が変態だという認識と
それを曝け出して恋人の力●ルに拒絶された
経験から、相性の良さを訴え、献身的に
奉仕することで捨てられないようにしてくる)

「そうですねえ、大佐みたいな変態牝豚を恋人に持てて私は幸運な男です。愛してるよ、セ○ベリア」
「～～～っ♥♥……わっ、私も……愛してる……♥♥」
（こうやってちょっと愛情って餌をやればあっさり犬みたいに尻尾振って喜んでくる。
商売女顔負けの淫らなパイズリフェラしながら乙女チックな喜びに浸るギャップが面白いな）

「ふふ♥ ロマ○コでもっと気持ちよくして、
ザーメンたくさん絞りとってやるからなっ♥
ぐぽっ♥ ぢゅぽぢゅぽぽっ♥ ぢゅぶぷぷっ♥」
（ひひっ、こんだけチ○ポに吸い付いてたら
どんな美貌も台無しだな。
今のセ○ベリアなら暗示を付け足さずとも
愛の言葉を囁けば、人前だろうが戦場だろうが
どんな変態行為も喜んでやるだろうな）

「ぐぽっ♥ ぐぽぽっぢゅぽっ♥
ぢゅるるぅぅっぢゅびぢゅぷっ♥ んぷっ♥
どうひゃ、ひもひいいふぁ？♥」
「ええ、ロマ〇コと乳マ〇コの
連携プレイでもう射精てしまいそうですよ」

「んふっ♥ いいひょ♥
このままくひまんこになかだひひてくれっ♥」
「今のセ○ベリア様のロマ○コっぷりなら
本当に口でも孕めそうです、ねっ！
ほらたっぷり飲んで孕めっ、セ○ベリア！」
「んぶぶひゅああっ♥♥♥」

「はぁぁ～……♥
相変わらず馬並みの大量射精だ♥
ふふ、しかもまた硬くなってきて……♥
どうする、次は乳マ〇コに中射精しするか？
お前は私のデカパイが大好きだからなっ♥」
はぁ…♥
「ひひ、お願いします。
でも別にエロ爆乳だけじゃなくて
具合のいいマ〇コも肉付きのいい桃尻も
汗で蒸れまくりの臭い腋マ〇コも……
セ〇ベリア様の身体全部を愛してますよ」
「ばっ、馬鹿……♥ んちゅっ♥」

「いやあ、射精してもセ○ベリア様が離してくれないせいで結局3回もしちゃったからお腹ペコペコですよ」
「なっ、お前だって乗り気だったじゃないか！まったく……少し待っている。すぐ昼食を用意するから♥」
（さて……この新妻のようなセ○ベリアも悪くはないけど少し食傷気味だし、趣向を変えてみるか）

「【今は勤務中で、目の前にいる男は上官。
彼の質問は重要な事情聴取だから包み隠さず答えなければならない。
またこの状況や彼の行動、自分の格好に疑問を持ってはいけない】」
『……勤務……答える……疑問……持たない……』

「よろしい。それではこれより君の淫乱度及び
私生活の聴取を始める。何をされても可能な限り
平常心を保ち、包み隠さず質問に答えるように」
「了解しました、閣下」
（ひひ、最近は仕事中ですら色ボケしてすきあらば俺に擦り寄って
チ○ポねだってくる有り様だったから、新鮮に感じるな）

「まず君は以前カ●ル少尉と交際していたはずだが、今現在彼のことをどう思っているのだね？」
「んっ…　カ●ル少尉のことはもう考えたくもありません。それと、その情報には誤りがあります。
ほんの一時カ●ル少尉に好意を持ったのは事実ですが、それは気の迷いであり、また彼とは儀式を行っておらず恋人だった期間は一瞬たりともありません。あんな狭量な男、今では嫌悪感すら覚えます」
（ははは！　あの時刷り込んだ常識から、そんな解釈導き出したのか。カ●ルくんも嫌われたもんだ。よほど拒絶が堪えたらしいな。そこら辺の記憶は弄ってないはずなのに、女は怖いねえ）

「ふむ…次は現在交際している●●●中尉についてだ。彼はどうなんだ？　彼とも気の迷いなんじゃないか？」
「いっ、いえ、●●●は儀式も済ませた正式な恋人ですっ！私は彼を愛して……♥彼も、カ●ルなんかとは違って、変態牝豚の私を受け入れ、愛してくれています♥
も…もし、可能なら……軍を退役して、彼の妻になり…そして、彼の子を……♥」
（……く、ははっはははー！存外女らしいところがあるとは思っていたが、ここまでとは！変態女に堕ちただけじゃなく、石の力で演出された愛情からこんな可愛らしい未来図を考えていたなんてな）

「しかしねえ、君はちょっとマ〇コを舐められただけでマン汁垂れ流し、こうやって他の男のチ〇ポを平気で受け入れる変態豚だ。彼への想いも所詮チ〇ポに惹かれただけで、愛情なんて高尚なものじゃないだろう」
「んんっ…♥　そ、んなことはっ……♥」

『ほう、否定するつもりか。
だけどマ〇コの方は違う意見のようだぞ。
ほら、こうやって激しくしてやってもしっかり食らいついてくる』
『んぁっ♥ ひっ♥ ひゃうっ♥
ちがっ♥ ちがいますうっ♥
わたっ、わたひはぁっ……♥』
『何も違わないだろう。君の痴女行為に参加した部下も言っていたぞ。
『ザーメンかけられただけでイク淫売だ』と』

「ふふ、そんなに声を上げてると
●●●中尉が来るかもしれないぞ？
いくら君を受け入れると言っても
他人のチ○ポでよがってるところを見たら
見捨てられるかもしれないな」
「ひっ…！　いやぁっ…！
ふぃっ、ぐうっ…♥……！♥」
（お、我慢しだした。さてどれぐらい耐えられるかな。
最後まで大声あげなかったら……ひひ、望み通り【結婚】してやるか）

「ほう、変態豚の淫売にしては頑張るじゃないか。
だが膣内で射精されたらどうかな？
君はそれが大好きらしいからなっ！」
「いいいっっ……！♥
……っ！♥ うっ……！♥ ……♥
ひうう……♥」
（ふひひ、アクメ顔晒しながらも耐え切るなんて
いじらしいじゃないか。マゾだからこんな場面じゃ
さぞ感じてただろうに）

「う～む、君の肉欲に負けない愛の深さには感服したよ。
褒美に私の方から●●●中尉に君との結婚を打診してあげよう」
「あひ…♥ あ…ありがとうございますっ…閣下っ♥」
「うむ。ああ、ザーメンが垂れて
●●●中尉に見咎められないように
ニンジンで栓をしておこうか。
今日一日抜け落ちないよう気をつけるんだぞ」
「はい… あぁ…うれしい……♥」
（ひひ、最高の結婚式を用意してやるからな……）

数カ月後…
「ひひ、お腹も胸も大きくなりましたねえ。
しかしすっかり妊婦らしくなってきたのに
こんないやらしいなんて悪いママだ」
「ふふ♥ じゃあパパのチ○ポでおしおきしてくれ♥」
（結婚し、軍を抜けて●●●の子を授かり……
望んでいた通りの夢の様な生活だ♥）

数日後

（今日は●●●と私の結婚式だ♥
急なことだったが上官が無理あって
くれたのもあり、行うことができた）
（●●●のお陰でウァ〇キュリア人の
伝統の変態豚嫁衣装を身につけ、
乳首に結婚指輪まで……♥
●●●のような男と結婚できる私は幸せものだ♥）

「皆、今日は私達の結婚式に
参加してくれてありがとうマ○コ♥」
（【変態豚嫁の挨拶は下ネタ】
●●●に言われなければ
忘れるところだったな）
（ああ、部下達も皆笑顔で……
【チ○ポ勃起させて祝福】してくれている♥
皆私のマ○コを視姦してるな♥
ふふ、変態豚嫁として
恥ずかしくない正装をしてきてよかった♥）

「でっ、では豚嫁が
嬉ションシャワーするから
皆ザーメンシャワーで
祝福してくれマ〇コぉっ♥」
（あぁぁっ♥ 部下に見られながらする
おしっこきもちいいっ♥
恥ずかしさと臭いでイッてしまいそうだが
終わりまで耐えねばぁ……♥）

「ふひゃぁいいい♥♥
みんなありがひょうう♥♥
わたひひあわひぇ…♥
ひゅくふくひゃーめん
ありがひょまんこぉ♥♥」

『いいですよ～、ほら！』
『あひゅうんっ♥♥♥
パパチ○ポきたぁっ♥♥♥』

「ひひ、孕んでも相変わらずの乱れっぷりですねえ。
いや今の方がもっと淫らになったかも」
「んっ　んふっ　お腹が大きくなって、
いつも以上にお前のチ○ポが深くきてぇっ♥
きっとお腹のこの子がパパとママに
愛し合ってほしがってるんだっ♥
ママっ、パパを愛してるぞっ♥
愛してるっ♥愛してりゅ○○○っ～～♥」

「深く愛してもらって光栄ですが
いつもそれじゃ飽きるんでね」
「ひ……？」

『……ん？』
『はい、久しぶりに【常識や価値観、記憶全てを暗示かけられる前】の自分に戻った気分はいかがですか～？』
（ここは……私は何故裸で……？この男は…）

「なっ!? なんだこれはっ!?
○○○中尉っ! 何のつもりだ!
私からどけぇっ!!」
「ははは、混乱してるみたいですねえ。
私が、大佐……ではもう無いですね。
セ○ベリア様に乗っかられてるんですよ。
さっきまであんなに愛してる愛してる
言いながら情熱的に腰振ってたじゃないですか」

「なっ、くっ、何を馬鹿な……！
一度しか言わない、今すぐこの妙な真似をやめろ！
さもないと、命はないぞ！
貴様も私の力は知っているはずだ」
「いいですねえ、それでこそ
蒼い魔女、セ〇ベリア・ブレス大佐。
ボテ腹でチ〇ポにまたがってなきゃ
震え上がっちゃうところですよ」

「でもこうやってちょっとチ〇ポで小突いてやれば」
『あひゅっ♥♥』
「開発され尽くした身体はそのままですからね。
その時点の記憶では多分ご存知無かったでしょうけど、セ〇ベリア様は子宮口にチ〇ポでキスされるのに弱いんですよ」
（からだがぁ♥なんだ？なにがおこってる？）

（そうだ、私は……）
『うあぁぁぁぁ……！』
『お、記憶が戻って来たようですね。
まず【一度イクと記憶が現在まで戻る】よう
暗示をかけましたからね。
ちなみに【二度目で暗示で変わった常識・認識
感情すべてが再び効果を発揮する】ように
なってるので、まあ耐えてみてください』
『ぐううう……っ！
貴様あっ……！』

「えへ☆　あへあぁっ♥♥♥」
「おや、ご自分から腰下ろしてイッちゃいますか。
これは予想外だったなぁ」
「ひゃってえ…　もうどこにももどれないけどぉ
おまえならあいしてくれるりゃろぉっ♥
いっぱいあいひてぇっ♥」
（ああ……自分の思考が
塗り替えられていってるのが
わかる……こんなの……
こんなの……しあわせ♥）

「まま、ちゃんと教えられたらそのままま解放してあげてもいいですよ。
まま、再び性奴隷調教として公園や地域で有名になってるから良ければいいでしょうが。
そうそう、元恋人のカ●ルくんも最低の変態女だって世界知ってましたよ」
「こあああ……嫌れ…犯されるるるー」
(うう……
やっ…やっ私は何を……)

数年後…
「んっ♥んっ♥んちゅっちゅぷっ♥
はぁん♥んふっ♥んぢゅぷんんっ♥」

「ひひ、愛してるよ。セ〇ベリア」
「うれしい……♥
私もだ♥
お前も、お前の子も、お前のチ〇ポも
ザーメンも心から愛してるぞ♥」
（こんな素敵な生活、
変態豚嫁冥利に尽きる……♥
私は本当に幸せ者だ♥）

「んふっ♥ んっ～♥ あっ… はぁ、はぁ…♥
あんっ♥ あなた…♥ どうして…？」
「ん？　子どもたちの様子を見てこようかと思って」
「そんな、さっき寝かしつけたばかりだから
まだ大丈夫だ……
だから、続きを…♥」

「いやいや、まだ小さいから心配だよ。
さ、足ほどいて」
「い、いやだっ♥
そんな意地悪しないでくれぇ♥
ここまで高ぶらせて焦らすなんて
あんまりだぁ！
絶対離さないぞっ♥」

「しょうがないママだなあ。
そんな声上げて駄々こねて、子どもたちが
何事かと見に来たらどうするんだ？」
「んちゅぅぅ～っ♥ んふぅ♥
あ、あの娘達もヴァ○キュリア人の女だ。
いずれ【パパに奉仕する変態になる】のだから
今から英才教育すればいいっ♥
んふっ♥ だからもっとぉっ♥
べろべりょぉ～♥」

「ひひ、母親に似て美人だからなあ。
そんな仕込まれたらセ〇ベリアより
夢中になっちゃうかもしれないぞ」
「れろれろっぢゅぷっ♥ぢゅぷぷにゅぷっ♥
んべぇろぉっ♥
いやぁっ♥ママ負けないからっ♥
娘たちにない淫乱乳マ〇コと
熟れ尻マ〇コでいっぱいご奉仕するからっ♥
捨てないでっ、あなたぁっ♥」

「はは、捨てるわけないだろう。
あの子達じゃこんなエロママには敵わないよ」
「～～～～っ♪　んちゅうううっ♥
ぶぢゅうっ♥　れりりゅっんぢゅうううう♥♥」

「なんだ、またキスだけでイッちゃったのか。
お気に入りのこの体位でやるといつも一人で
勝手にイクんだからなあ」
「あんぅ…♥ ごめんなさい♥
でもこの体勢が一番すきなんだぁ♥
愛しいあなたの顔見ながら
チ○ポ奥までハメてもらえるから……♥
ん、今度はもっとマ○コ締めるから
もう一回……♥」
「ひひ、愛しの妻の頼みならしょうがないなあ」
「んふ♥ うれしい…♥」

「今日は何から始めるんだ？
チ〇ポカウンセリングでもケツハメでも
用意はできているぞ♥」
「ははは、やる気満々ですねえ。
でも今日は趣向を変えようかと」

「というわけで、これから【今まで何をされたのか
正常に認識】してもらいます。ただし【……

「……」です。わかりましたか？」
「すべて……認識…おもい……だす……」
「結構です。じゃあ始めましょうか」

「貴様っ！　これまでよくも弄んでくれたなっ!!
覚悟しておけ、楽には死なせないぞ！」
「おお、怖い。
一体何をするつもりですか？」

「ふん、ニヤけていられるのも今のうちだ。
私がこの体勢を取った以上
貴様には正義の裁きが下されるっ！
さあ私の腋に顔を押し付けろ！」

『うわー、大佐の腋くっさいなあ』
『当然だ、【ヴァ○キュリア人の腋臭は悪しきものには耐え難い刺激臭となる生物兵器】なのだからな！　さあ、観念しろ！』

「へえ、臭いだけで別に何ともないですけどねえ。
これって私は悪くないってことですか？　ひひっ」
「なっ!?　くっ……そんなはずはない！
ふん、やせ我慢したことを後悔させてやろう」

「ならばこれでどうだっ！
【ヴァ〇キュリアの処女膜は
悪しき者が見ると目が焼けただれる】！
貴様の瞳に我が処女膜を
焼き付けてやるっ！」

「何ともありませんよ。
そもそも大佐の処女膜なら
私が破らせてもらいましたし」
「はっ…!? そ、そうだった……
ぐっ…こうなったら……」

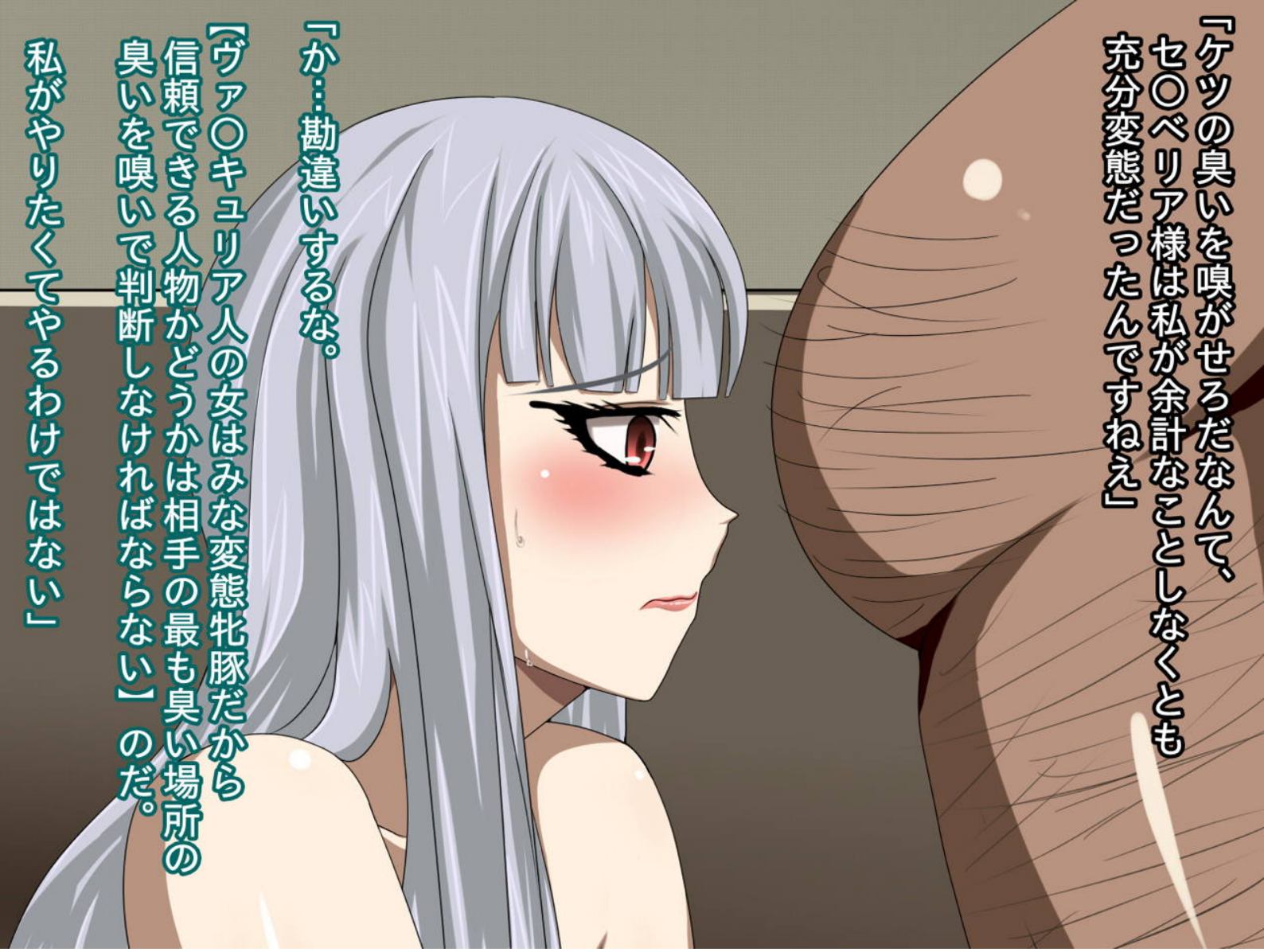
「くっ…くらえっ！
【おしっこしーしー砲】っ！」

「ははは！　急になんです？
立ちションしないといけないほど
漏れそうだったんですか？」
「ふんっ、笑っていられるのも今のうちだ！
これこそヴ〇ルキュリア人の
禁断の秘儀、おしっこしーしー砲！
【悪しき者がこの小便砲撃を浴びれば
たちどころに皮膚は焼けただれ、
骨が腐り落ちて溶けてしまう】という
恐るべき攻撃だ！」

「あまりに残酷かつ恥辱の技ゆえに
極悪人以外に使うことは
禁じられているが、
貴様にならふさわしい。
自分の行いを悔やみながら
消え去ってしまうがいい！」

「……無ッ理無ッ理無ッ理ですが
ヤッパリあらぬ方向トベるんですかッ」
「なッ…!!」
(そんな…何故だ!!
まさか……)

「ふふっ、本気でやってるなら、
やっぱり私は悪くなかったという
ことになるんじゃないですかねぇ。
厚い膜張がせたり、汚いもの
見せつけてきたことを
謝ってもらえませんか？」
（くっ、確かにそうなる……
しかし、だとしたら……）
「……い、いいだろう。
だが、最後にもう一度だけ貴様に
本当に非がないのか確かめさせてもらうぞ」

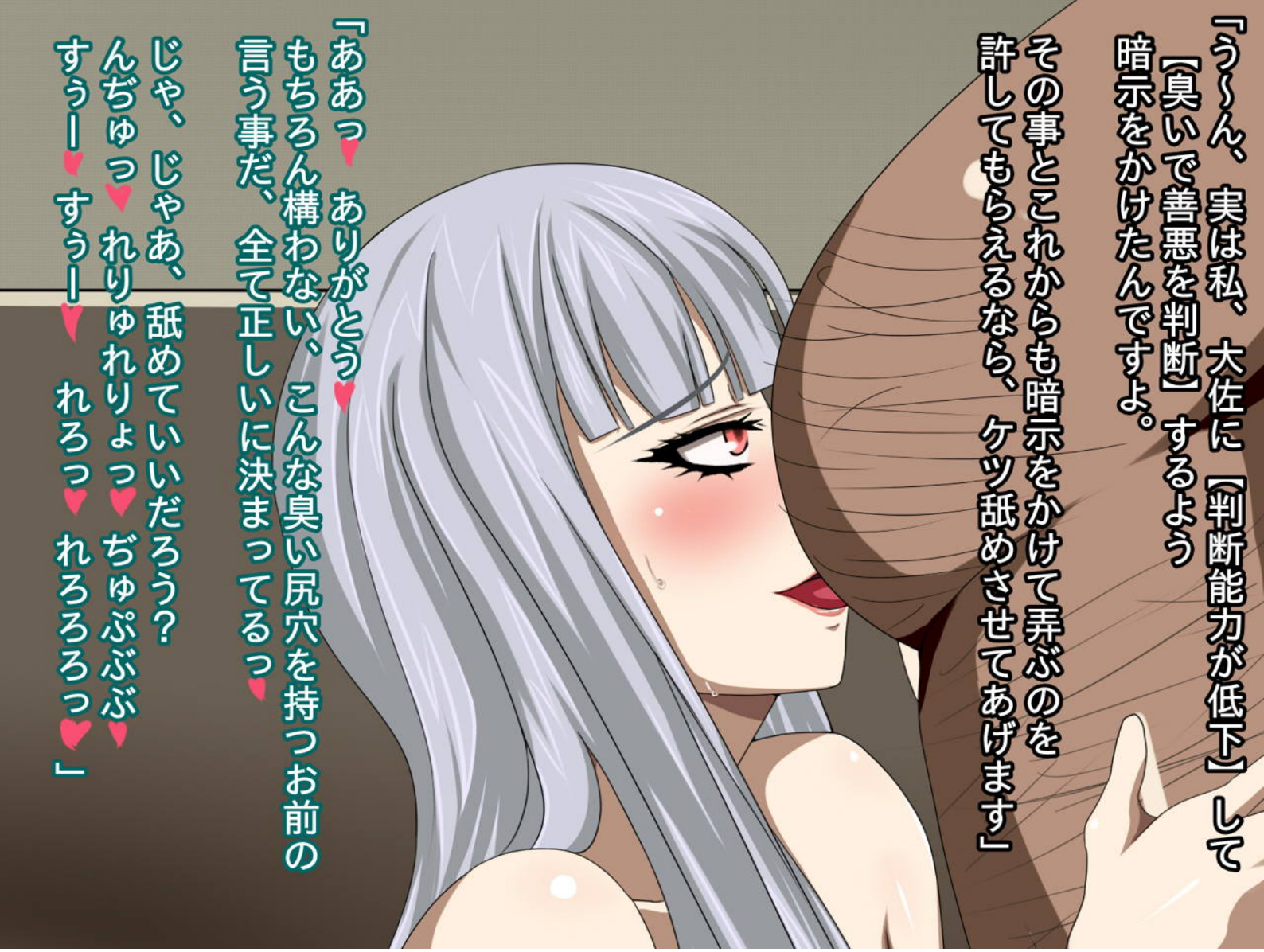

「ケツの臭いを嗅がせろだなんて、
セ〇ベリア様は私が余計なことしなくとも
充分変態だったんですねえ」
「か…勘違いするな。
【ヴァ〇キュリア人の女はみな変態牝豚だから
信頼できる人物かどうかは相手の最も臭い場所の
臭いを嗅いで判断しなければならない】のだ。
私がやりたくてやるわけではない」

「まあ嗅ぐだけなら構いませんが、
さっきトイレに行って拭いた覚えが無いんで
臭くても勘弁してくださいよ、ひひ」
（うぅっ、確かめるためとはいえ
こんな場所に顔を埋めないといけないとは……
あぁ、やはりひどい臭いだ。
この臭い……）

「はあはぁ♥　ふー♥　ふー♥　すぅ～♥」
（あぁぁ♥　何故だ、臭いのに、
こんなに臭いのに興奮してもっと深く
肺の奥まで吸い込みたくなるっ♥）

「れろっ♥ ぞりゅぞりゅっ♥ はぁ♥ はぁ♥
ぢゅりゅうぅぅ♥」
（ああっ♥ 味もひどいっ♥
変態牝豚にはたまらない味だ♥
いつまでも舐めていたくなる……♥）

「あれ、舐める必要もあるんですねえ。
それで私の身の潔白は証明されましたか？」
「あ、ああ。お前が正しい。こんなに【臭くて
変態牝豚を発情させる臭いをしてる人間の
やることが間違ってるわけがない】っ♥
だ…だから、私が間違っていたおわびに
お前の尻を私に綺麗にさせてくれっ♥」


「う～ん、実は私、大佐に【判断能力が低下】して
【臭いで善悪を判断】するよう
暗示をかけたんですよ。
その事とこれからも暗示をかけて弄ぶのを
許してもらえるなら、ケツ舐めさせてあげます」
「ああっ♥ ありがとう♥
もちろん構わない、こんな臭い尻穴を持つお前の
言う事だ、全て正しいに決まってるっ♥
じゃ、じゃあ、舐めていいだろう？
んぢゅっ♥ れりゅれりょっ♥ ぢゅぷぶぶ♥
すぅー♥ すぅー♥ れろっ♥ れろろろっ♥」

数日後

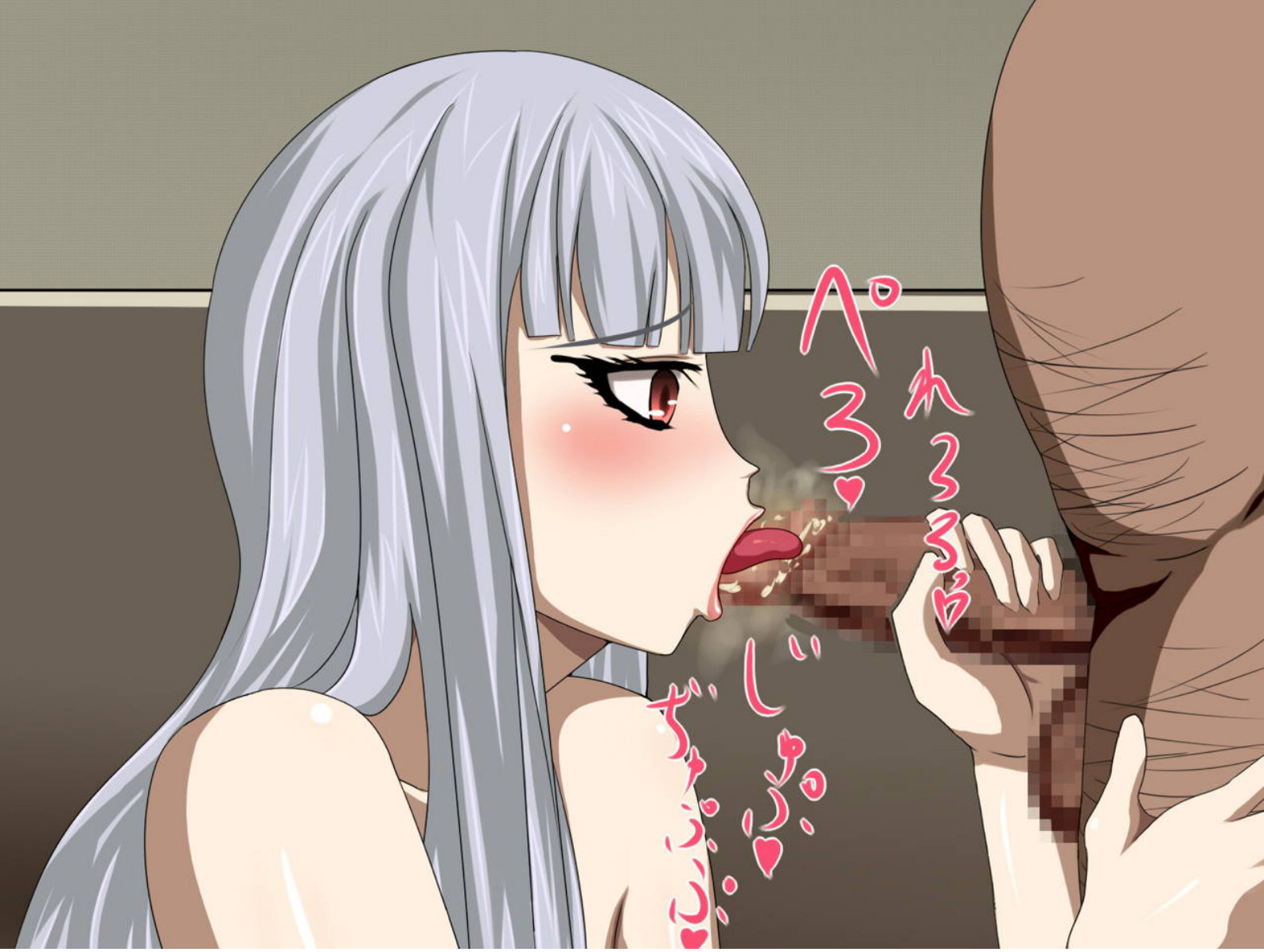
「やあ、おはようございます、セ○ベリア様」
「ああ、待っていたぞ」

「今日も牝豚大佐の任務遂行に
協力よろしくマ〇コ♥」
「ひひ、その挨拶も板につきましたねえ。
ちゃんとマ〇コの用意もしてあるようだ」

「うむ、ちゃんとお前のパンツの
臭いでオナって三回イッておいたぞ♥
さあ今日はどのマ〇コを使う？
どれでもお前が一番乗りだぞ♥」

「じゃあロマ〇コ使わせてもらいますね」
「うむ、了解した♥
ふふっ♥ 今日もこんなにチンカスを
溜めて来てくれたのか♥ んちゅ♥」

「んぷっ…♥ぢゅるる♥ぢゅぷぷ♥」
（このむせ返るようなオスの臭い、
刺激的な塩味……♥
職務だがすぐに終えてはもったいない♥
じっくり味わってから飲み込ませてもらおう♥♥）


れろろ
ぺろ♥
じゅぷ♥
ずぷぷ♥

「もぐもぐ…♥ ぐちゅっ♥ くちゅっ…♥
こきゅっ♥ 今日もエグみのある
いいチンカスだったぞ♥ ちゅっ♥」
（よし♥ 次はメインの……）

「んぼっ♥ ぢゅぶぶ♥ くぽぅ…♥」
（●●●中尉のチ○ポだと
口をいっぱいに開かなければ
咥えられないから一苦労だ♥
その上……♥）

「ぐぼっ!? ごほっ…」

「ずじゅる♥ぢゅるっ♥ぢゅるるるぅ♥
ふごっ♥ふぶっ♥ぢゅぷぽぽ♥」
（まったくこの男ときたら……♥
こうやってデカチ○ポで
喉奥まで犯すのがよほど好きらしいな♥
いくら
【牝豚大佐は軍属の家畜】で備品扱いとはいえ
ここまで物扱いして性処理に使うのは
この男ぐらいだな♥）

ちゅぽ♡
くぽっ♡
ぬぷ♡
ずるるる♡

「んぶぢゅるるるっ♥ じゅぶぢゅぶっ♥
ずぶじゅっ♥ ぢゅぷっれりょれろぉっ♥♥」
（んふっ♥ 根元の臭いは濃いな♥
陰毛が密集してるここに鼻を突っ込むと
ああっ♥ ずっとこうしていたいっ♥）

「ぶぼぁっ!? んぶぅっ…♥」
（いつものことながらロマ〇コを
孕ませようとするかのようなこの射精量……♥
鼻まで犯してくる♥
ああっ、ザーメンが吹きこぼれてしまった。
もったいない、後で舐め取らねば♥）

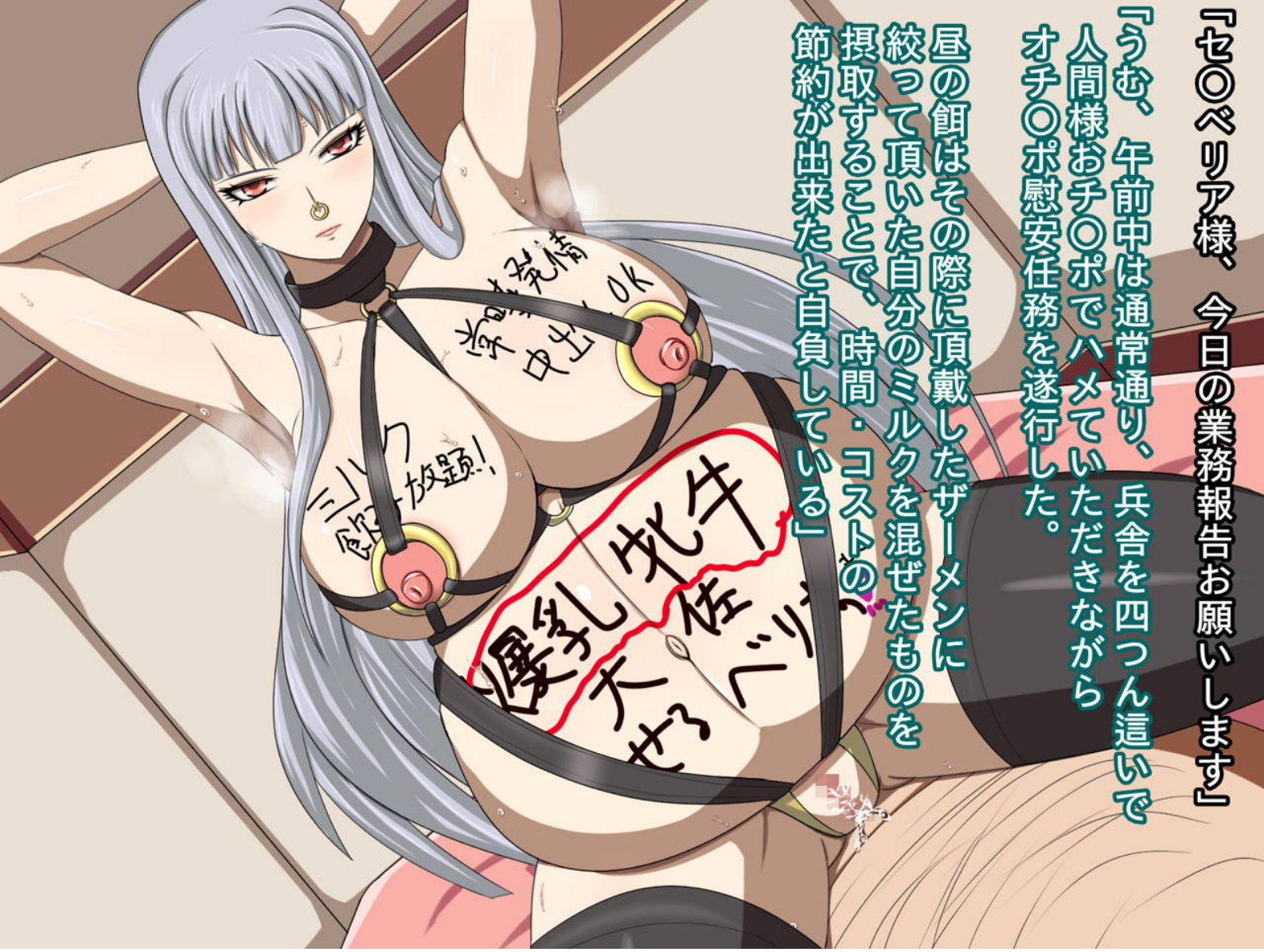
「ひひ、やっぱり朝一番はよく出るなあ。
あ、飲み込んでいいですよ」
「ひゃひいひゃひょうっ♥ もぐっ♥ んくっ♥
はぁ……♥♥」
（ぷりぷりのザーメンはやはりいい♥
これを毎日飲めるというだけでも
牝豚大佐の地位につく価値があるというものだ♥）

「やあ後処理はそれぐらいで充分ですよ。
そろそろ準備しないと」
「ぺろぺりょっ れろぉ…♥
ん、あ、ああ、そうだな…♥ れろろっ♥」
（いけないな、つい職務だというのを
忘れてチ〇ポ舐めに没頭してしまった♥）

『はい、出来ましたよ。
今日も牝豚大佐のお仕事
頑張ってくださいね』
『うむ、ご苦労』
（さて、今日は何人に利用されるだろうか♥
チ○ポを洗わず、小便も私で済ませるよう
部下たち皆で協力してくれて有難いことだ♥
ああ、そう言えばカ●ルには泣きつかれたな。
まったく、牝豚大佐に任命された以上
恋人でいられるわけもないだろうに……）
変態露出狂♥
デカ乳
マゾ
牝豚
淫乳
マゾ奴隷

「うわぁ、今日もたくさん使われたみたいですねえ。何人来たんですか？」
「はへ…♥ く…ロマ○コが三十四人、髪マ○コに十四人、腋マ○コが十一人手マ○コ十九人、ケツマ○コ二十二人マ○コが五十七人、足マ○コで五人だ……♥」
「やっぱりマ○コが一番人気なんですねえ。まあ種付け完了するまで頑張ってください」
「ああ、まかしてくりぇ……♥」

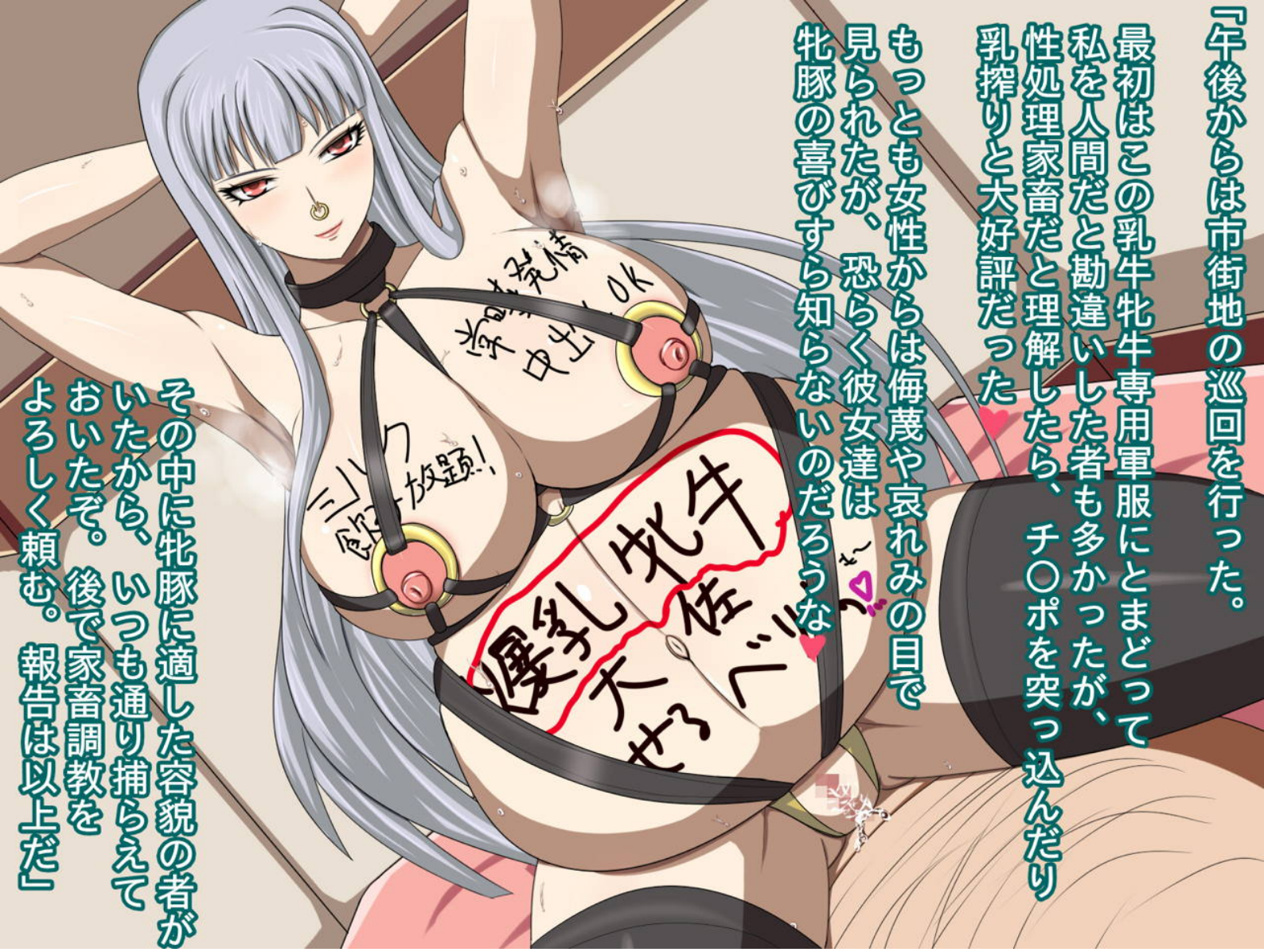
数カ月後

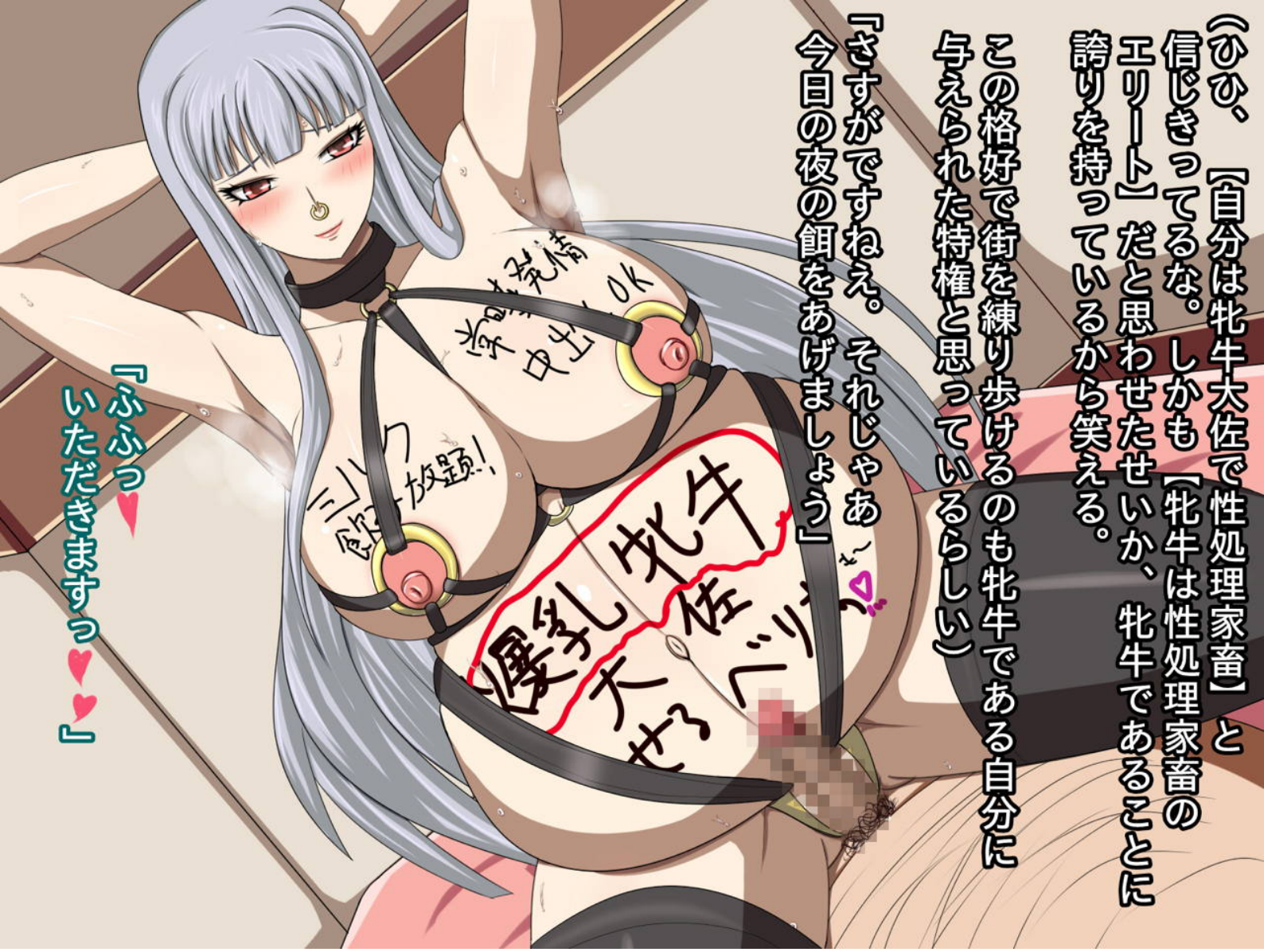


「セ○ベリア様、今日の業務報告お願いします」

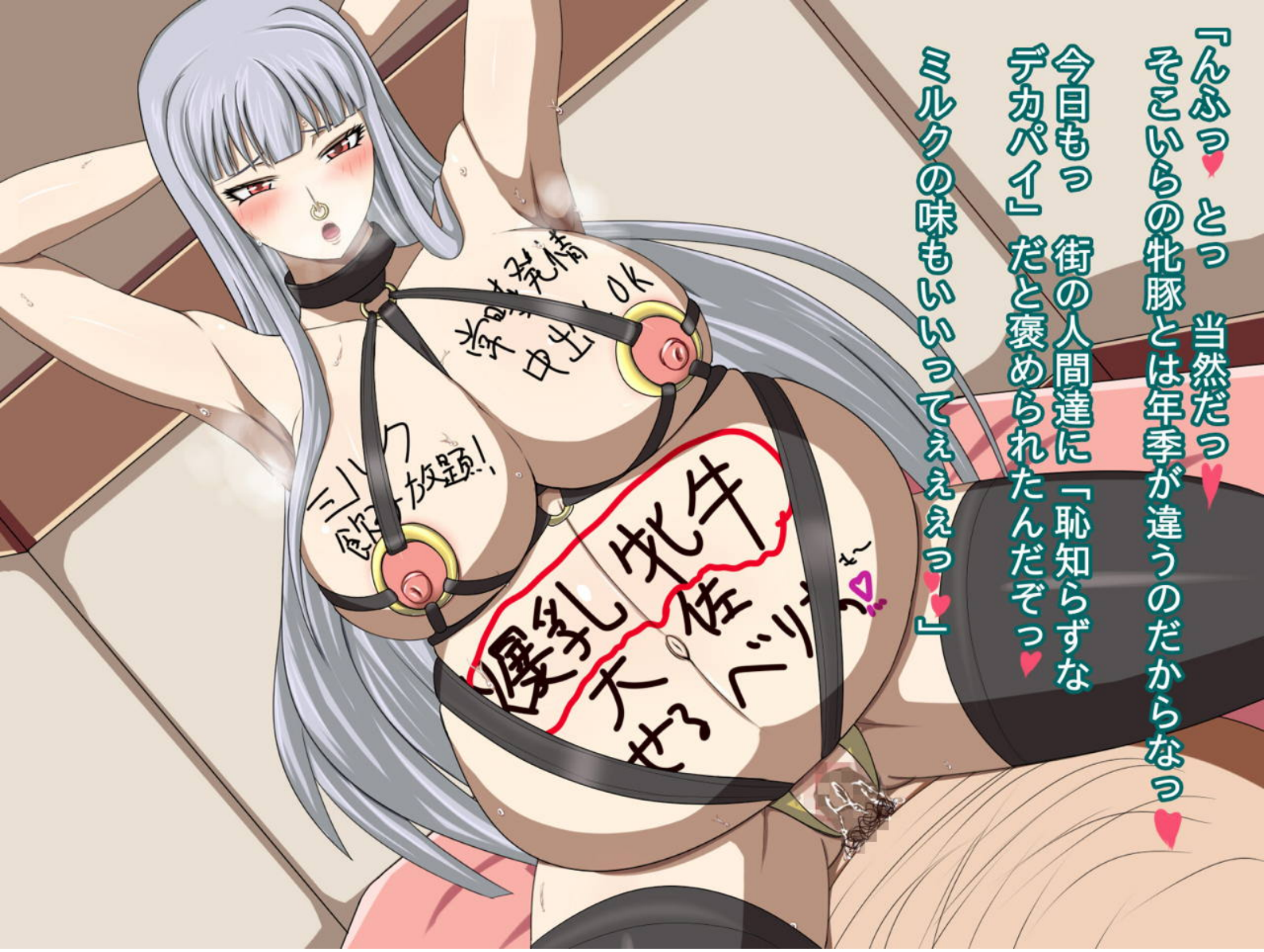
「うむ、午前中は通常通り、兵舎を四つん這いで人間様おチ○ポでハメていただきながらオチ○ポ慰安任務を遂行した。

昼の餌はその際に頂戴したザーメンに絞って頂いた自分のミルクを混ぜたものを摂取することで、時間・コストの節約が出来たと自負している」


「午後からは市街地の巡回を行った。
最初はこの乳牛牝牛専用軍服にとまどって
私を人間だと勘違いした者も多かったが、
性処理家畜だと理解したら、チ○ポを突っ込んだり
乳搾りと大好評だった♥
もっとも女性からは侮蔑や哀れみの目で
見られたが、恐らく彼女達は
牝豚の喜びすら知らないのだろうな♥
その中に牝豚に適した容貌の者が
いたから、いつも通り捕らえて
おいたぞ。後で家畜調教を
よろしく頼む。報告は以上だ」
乳牛
牝牛
佐
大
せろ
べ
ッ
ぢ
ぇ
~
♥
♥
♥


（ひひ、【自分は牝牛大佐で性処理家畜】と信じきってるな。しかも【牝牛は性処理家畜のエリート】だと思わせたせいか、牝牛であることに誇りを持っているから笑える。
この格好で街を練り歩けるのも牝牛である自分に与えられた特権と思っているらしい）
「さすがですねえ。それじゃあ今日の夜の餌をあげましょう」
『ふふっ♥いただきますっ♥♥』

『んほぉぉぉぉっ♥♥♥』
（あえて信頼はそのままで【俺は家畜の調教係で人間だけど家畜の自分と友人になってくれた】と刷り込んでみたのも正解だった。
単に従属させるよりもよほど面白い）
『さすが牝牛。鳴き声も獣じみてますねえ』
牛乳
牝牛
搾乳
牛乳
飲み放題！
中出し OK



「んふっ♥ とっ　当然だっ♥
そこいらの牝豚とは年季が違うのだからなっ♥
今日もっ　街の人間達に「恥知らずな
デカパイ」だと褒められたんだぞっ♥
ミルクの味もいいってぇぇぇっ♥」

「へえ、でもそれほど牝牛っぽくないですよね。
顔も鳴き声もふごふごみっともなくて
牝豚みたいですよ。
それにミルクも出てないし」
「なっ　何を言うんだっ♥
くぅっ　んはぁっ♥あぅっ　違うっ
も、もぉっ～♥もぉぉぉほぉっ♥」
（ひひっ、こうやって煽ると
鳴き声を慌てて変えて……
よっぽど牝牛に見られたいらしいな）

「お♥　ミルクだ♥　ご褒美たくさん絞られたから
出ないと出ないもの～♥
見てる♥　今いっぱい出すから♥
んっ♥　ふっ♥　もおっ♥　もおおおっ♥
んぢおっ♥　もおおおっ♥」

『もおおほおおおおっっ♥♥♥
ほ、ほりゃ……♥いっぱい射精たもぉぉ……♥？」
「ひひっ、そうですね。やっぱり大佐は並ぶもののいない変態牝牛ですよ」
「あへっ♥とうぜんりゃぁもぉ～……♥」
搾乳牝牛
大佐
ミルク飲み放題！
家畜発情
中出し OK